里大方正

~燎原の火は方正から~

徐士蘭さんのウソと真実

一孤児には重すぎた二つの十字架-

難民を呑みこんだ河―方正への逃避行調査報告 私にとって「満州」とは何だったのか 「日本人孤児と中国養父母展」を開催 新中国で体験したこととは・・・

一1946年~1969年、文革初期まで中国に住んでいた私一

奥村 正雄

郭 相声・石 金楷篠原 浩一郎大類 善啓岡崎 温



天理教が送りこんだ「開拓団員」が建てた家。

ハルピン市郊外の旧天理村の中心集落であった「生琉里」(ふるさと) に残された日本人家屋はこの1軒のみ。2015年10月現在も人が住んでいる

なぜ方正(ほうまさ)なのか?

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒龍江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「方正友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』(せいかほうまさ)なのか?

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、 やがて「燎原の火のように方正から平和と人類愛的な友愛の精神が広まるのだ」という意 味を込めて会報の名前にした。

星火方正 (第21号) ~燎原の火は方正から~

目 次

徐士蘭さんのウソと真実 一孤児には重すぎた二つの十字架	奥村 正雄	1
難民を呑みこんだ河 郭 相 一方正への逃避行調査報告	声・石 金楷	5
家族の「満蒙開拓」体験に思う	村上 三保子	8
	• • • • •	
私にとって「満州」とは何だったのか つれづれ思い出すまま<満州覚書>	篠原 浩一郎	10
	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	
「日本人孤児と中国養父母展」を開催	大類 善啓	12
「日本人孤児と中国養父母展」スナップ写真		13
「日本人孤児と中国養父母展」をどう見るか 一戦後70年、いま2つの「もしも・・・ならば」を巡る若干の考察―	田村 美佳	15
母の愛は永遠 中国養父母展 東京で開催	石 金楷	17
関連記事紹介		19
	• • • • • •	
新中国で体験したこととは・・・ 1946 年~1969 年、文革初期まで中国に住んでいた私	岡崎温	24

天を恨み、地を呪いました 松田ちゑさんの半生 ②	奥村 正雄	37
澤地久枝さんの阿智村での講演	寺沢 秀文	42
満蒙開拓平和記念館を訪れて	風間 成孔	46
「中国帰国者 戦後七十周年記念公演会」を鑑賞	吉川雄作	48
	• • • • •	
ある中国残留孤児が綴る『この生あるは』を読む	石尾 喜代子	50
忌まわしい負の事実を問う ―小林節子著『私は中国人民解放軍の兵士だった』を読む―	石飛 仁	53
『「北支」占領 その実相の断片』を刊行して	田宮 昌子	56
	• • • • • •	
「大東亜聖戦大碑」について(続)	寺沢 秀文	58
周恩来と国際主義的精神 第2回	大類 善啓	59
参考記事紹介		66
――「方正友好交流の会」へのお誘い――	編集部	69
報告・編集後記		70

徐士蘭さんのウソと真実

―孤児には重すぎた二つの十字架―

奥村正雄

■ 遅すぎた確認

私が徐士蘭さんと劇的な対面をしたのは、今から8年前、2007年の6月だった。この頃、私は毎年、この時期に中国黒竜江省方正県にある日本人公墓参拝のツアーを組んで方正を訪ねつづけていた。この時期を選んでいた理由は2つある。一つはこの頃、日本はうっとうしい梅雨の時期だが、中国の東北部は毎日、湿度の低い、カラッとした晴天続き、年によっては道路の両側に植えられたアカシヤの花が舞い落ち、方正へ向かう私たちを笑顔で迎えるように、バスの窓から入ってきたりした。もうひとつ、この時期を選んだ理由がある。7月に入ると、夏休みをまじかに控えて航空運賃が高くなるから、だった。

この年、ツアーに記録映画作家の羽田澄子さんとそのスタッフが参加していた。方正に着いてホテルで昼食をとり、午後、バスで日本人公墓を参拝してホテルに帰ってきた時である。それまで玄関ロビーのソファーに腰を下ろしていた見知らぬ老婆と中年女性が、私たちの姿を見ると急いで立ち上がり、つかつかと寄ってきた。そして堰を切ったように早口の中国語でまくしたてた。このツアーには中国語の堪能な一人の若い女性が北京からハルピンへ来て、空港で私たちと合流していた。以前、日本で羽田さんの助監督を務めた佐渡京子さんで、その後、中国へきて北京の日本大使館に勤めている彼女が、羽田さんの通訳を買って出て、この時、その場にいた。

■ 作られたストーリー

「それでは部屋へ行ってお話を聞かせていただきましょう」 羽田さんが、そう答え、2人をつれて4階の私の部屋へ移った。

徐士蘭さんと向かい合って羽田さんが椅子に掛け、徐士蘭さんに付き添ってきた彼女の3 女・叢会霞さん、通訳の佐渡さん、助監督の佐藤斗久枝さん、そして私はベッドに腰掛け、 カメラマンが位置を変えながら徐士蘭さんと羽田さんを撮り続けた。

ここでの徐士蘭さんは、玄関ロビーで興奮して早口の訴えを矢継ぎ早にぶつけ出した時よりは少し落ちついてきたが、このところ、ずーっと胸にたまっていた鬱憤(うっぷん)をすべて吐き出すように、ひとりで話し続けた。

その内容は、これまで、この会報で何度もレポートしてきたような、生い立ちから結婚 までの、苦難にみちた前半生のストーリーだった。

1945年夏、方正県会発鎮小学校の屋外運動場に生後間もない彼女を抱いた実母があたまたと現れ、そばにいた青年・張文学さんにわが子を渡し、自分が着ていた着物の裾を 千切って子供の名前を書いた。これを張文学さんに渡した実母は、あたふたと走り去った。 まだ独身だった張文学さんは、預かった徐士蘭さんを知り合いの養母に渡した。養母は良い人だったが、まもなく死亡、代わって非情の養父が徐士蘭さんを奴隷のようにこき使った。学校にも行かせず真冬にも藁ぞうり履きで働きづめ…というストーリーを、本誌で何度も書いた。ふと巡り合った亡夫と結ばれて、初めて苦界から逃れ、人間らしい小さな幸せをかみしめたウンヌン…。いかにも首尾完結した悲運の孤児ストーリーである。

徐士蘭さんは、わが身が翻弄された、この生い立ちのストーリーを、古くから彼女を知る村の人たちの証言、文字を書けない人の証言は、代筆者の署名を添えて、日本の厚労省に提出した。だが厚労省は彼女を中国残留孤児とは認めなかった。これが本誌にこれまで繰り返しレポートしてきた「悲劇の徐士蘭物語」である。

■ 聞かれて漏らした虚構

ところが、あるとき、この肝心な生い立ちストーリーの核心となる部分が虚構であることを私は確信するに至った。一昨年(2013年夏)のことだ。それまで、「徐士蘭生い立ちの唯一の生き証人」と言われてきた張文学さん(故人)の「証言」の信びょう性が私の中で音を立てて崩れていった瞬間だった。私が徐士蘭さんと方正のホテルで初めて会ってから6年の時間が流れていた。ある時、「徐士蘭生い立ち」の核心部分である張文学さんという証人について、長年、私の胸の中で、レントゲン写真のカスミがかかった部分のような一点について、3女叢会霞さんに聞いてみたことがある。

「お母さん(徐士蘭)が実母から手渡されたという張文学さんに厚労省は会って話を聞いたことがあるのですか?」

叢会霞さんは無表情のまま、そっけなく答えた。

「あります」

私は内心の動揺を顔に出さず、「どこで?」と重ねて聞いた。

「ハルピンで」

いつもは私の質問に、早口で過剰なほどの言葉と笑顔で答える彼女は、この時、私の問いに対して、別人のように、無表情のまま、そっけなく答えた。そしてこの一点について、彼女は以後、触れることはなかった。それは徐士蘭母子にとって、他人には指一本、触れてほしくない「聖域」だったはずだ。

■撮り残した2カット

それまでに私たちが撮りつづけてきた彼女の記録映画『10日間だけの祖国』は、この時までに、もう8割以上、撮り終わっていた。残るは、それまでに理由があって撮れなかった部分、一つは彼女が孤児になった原点である方正県会発鎮の小学校。それまで校舎新築のために立ち入ることができなかった部分だ。もう一つは彼女を祖国へ招く手続きを進めてもらう上で、重要な役割を担ってくれた黒竜江省外事弁公室の徐広明さんのインタビ

ューだ。それまで彼が外国出張などのために、撮れなかったカット、この二つだった。

このカットを撮り終えて私たちの撮りたかった映像はすべて揃うことになった。あとは登場人物が語る中国語の部分を日本語の文字に替えるスーパーインポーズ、そして最後に、この映画を作る上で、さまざまな形で世話になった人たちの名と音を入れ、5月に締め切りを迎える大分県の湯布院映画祭の新人賞コンテストに応募しようと考えていた。

■運命を分けた尋問

だがこの計画はもろくも瓦解した。私の問いに叢会霞さんが漏らした、張文学さんという「生き証人」の危うさ。徐士蘭さん側は、これを口が裂けても認めるわけにはいかない。 厚労省が徐士蘭さんを残留孤児と認めるかどうか、のキーマンだからだ。

いつもは表情たっぷり、多弁なほど話し好きな彼女が、この時、それ以上の言葉を発しなかった。私もそれ以上、この時も、その後も、この話題を徐士蘭さん側に持ち出したことはない。ただ、これまで、孤児徐士蘭さんが孤児であることを証明できる、唯一の生き証人、とみなされてきた張文学さんが存命中に、厚労省が直接、面接して、その結果、徐士蘭さんを残留孤児とは認めなかったのだ。厚労省は、ただ東京霞が関の庁舎の中で、申請書類から判断した、などということではなく、方正県の会発鎮から185キロ弱もあるハルピンまで呼び出して、直接話を聞いて出した<この証人は徐士蘭が残留孤児であることを証言できる人ではない>という判定だったのだ。

張文学さんという人は、終生独身で、人との付き合いもあまりなかったという話からすれば、彼が厚労省の面接調査を受けるために、積極的にハルピンまで出頭したとは考えにくい。徐士蘭さんにとっては自分が残留孤児である認定を厚労省から得るには避けて通れないハードルだった。徐士蘭さん側は、孤児の申請書を出した時点では、厚労省がハルピンまで来て、証人・張文学さんと直接、面談して申請に偽りがあるかどうかを確認までするとは想定していなかったのだと私は思う。それが徐士蘭さん側の思惑を超えて、張文学さんをハルピンまで連れて行かなければならなくなって、徐士蘭さん側は当惑しただろうと思う。しかし、いまさらこの「証人呼び出し」を避けるわけにはいかない。張文学さんが厚労省の尋問というハードルをうまく乗り越えてくれることを祈るほかなかっただろう。だがそれは初めから空しい願いだった。

こうして、徐士蘭さんが作り上げた、完璧と見えたフィクションはもろくも崩壊した、 と私は思う。

■ 神がつかせた嘘

しかし、だからといって徐士蘭さんが、厚労省が認めない虚構を作って墓穴を掘った、 などとは決して思わない。

厚労省がハルピンまで出向いて、徐士蘭さんの申請を審査するために、唯一の生き証人

と言われてきた張文学さんを徐士蘭さんに同道させることになろうとは、徐士蘭さん側は想定していなかったと、私は思う。中国で孤児になった経緯が不明なまま「不明」として申請し、日本に帰ってきた孤児は決して少なくない。その点からいえば徐士蘭さんもまた、孤児になった経緯は「不明」とし、厚労省から孤児としての認定を受けた上で中国にとどまる、という選択をした方がよかったのではないかと私は思う。医師や看護婦など、いずれも生活レベルの高い職業につく 3 男 3 女のカップルや孫たちに囲まれ、中国で幸せに暮らしている徐士蘭さんにとって、張文学さんに演じさせた「生き証人」の意味は何だったのか…私は今(1 1 月末)、すでに零下 1 0 度を下回っているという方正で、徐士蘭さんは今も眠れない真夜中に、「底なし沼に落ちてゆくような孤独」を感じているだろうか、と思う。

(おくむら・まさお:本会参与)

難民を呑みこんだ河

----方正への逃避行調査報告

郭 相声•石 金楷

死の渡し場

1945 年8月 15 日、日本の敗戦投降後、北満(現在の黒竜江省)に滞在していた日本の開拓団は、何の助けも得られないまま、本土への大逃避行が始まった。筆者は 1983 年、地方誌を編纂していた時、当時三江地区すなわち佳木斯(ジャムス)の広大な地区から方正県に至る開拓団難民の逃亡状況について広範な調査を行なった。現在既に 90 歳になる老人孫慶方に詳しく話を聞き、当時大羅勒密西河を渡った時の開拓団難民の死亡状況について検証した。

この渡し場は、当時、当地の人々から「死の渡し場」と呼ばれていた。1984年、方正県 に滞在する残留婦人及び残留孤児の多くは、佳木斯一帯より方正に留まった一大難民群で あることを筆者は確認している。

彼らの本籍は、東京、長野、鹿児島、千葉県、福島県、岐阜県、京都、山形県、三重県、滋賀県、横浜市、山梨県、福岡県、秋田県、埼玉県、岡山県、奈良県、山口県、静岡県、富山県等である。これらの日本開拓団は、三江省の広大な地区に分布していた「918」(1931年9月18日、満州事変のこと)以後、これらの地区の開拓団は、みな各自の開拓地点から、数人ずつ一かたまりとなって東から西へ、ハルピンに向かっていた。これらのそれぞれの開拓団から出発した老人、婦人、児童が必ず経由するルートは、すなわち依関県から牡丹江に渡り、その後方正県に向かって、やっとハルピンに到達することができたのである。

寒さ、飢え、疫病

沙河子(シャーホーズ)の残留婦人達を調査したところによれば、彼らは、「当初はソ連の共産党軍や土匪が恐くて、林の中の山道を行くしかなく、当時の気候は、毎日雨続きで、道路はぬかるみ、衣服も少なく、食料も足りない。凍りつき、飢え、病気が交じりあって、多くの婦人や児童が途中で死亡した。その時は、各自がみな死に直面して、誰も他を顧みることはできず、運命を天に委せるしかなかった」ということである。

吉林へ、方正へ

依蘭での筆者の調査によれば、当時の老人の話によると、開拓団の最も早い集団が、依 蘭県に到達した時、ある一群の開拓団民が松花江で日本の汽船に乗り込んだが、船が松花 江の真ん中あたりにさしかかった時に、ソ連の飛行機に沈没させられてしまったというこ とである。1,000 人にものぼる開拓団難民が、三群に分かれて避難した。一群は江北で、大 古洞、小古洞から西通河に入った。

他の一群は牡丹江より林口県に向かい、吉林省に行った。あともう一つの一群は、方正県の方に向かったということである。

方正県の方に向かった一群は、牡丹江を過ぎてから、南方の張広才嶺山区に入り、80 キロの山林を進んで、やっと方正県東部地区の重鎮大羅勒密に到達する(ここでいう重鎮とは、戦争によって一旦破壊された鎮の後に新たにつくられた鎮のこと)。当時は毎日雨が降り続き、川の水はあふれかえって、一群一群の開拓団難民達は、大羅勒密の西の川を経なければ、前進する術が無かったのである。

土地の人々が言うには、「開拓団難民達は、一群一群とやって来て、あるいは 10 数名、百人以上、千人以上、それぞれ違った人群がやってきて、どれぐらいの人群でどれぐらいの人数か知れないが、どのみち大多数は婦人、児童と老人であり、働きざかりの人は少なかった。」

30mから50m幅の滔々たる河川の水に直面して、どうして河(川)を渡ったのだろう。

川に張ったロープ

時は晩秋にあたり、体力を使い果たし、病人、飢餓者が多数を占めた。児童達は皆大人達が頼りで、強健な男達は、川におりて、泳いで、細長い布切れや、帯でつないだロープを対岸の樹木に固定し、こちらも樹木につなげて、数人、数人と子供を背負って、水で弧状になったロープにつかまりながら、胸までつかった河川の水の中でもがき、体力に耐えられない者は、冷たい河の水に足がつり、ささえられなくなって、子供と一緒に河の流れの中に消えて行った、孫慶方は自らの眼で、当時の惨状を目の当たりにした。死亡した子供は、ある者は岸辺の木の枝にひっかかり、あるものは、流れと共に松花江に流れていった。

同胞たちは、これらの人の死を見ながら、しかし誰も他人を救う力も無く、叫びと絶望の中、どれぐらいの婦人、子供達がその渡し場で亡くなったか知れない。

伊漢通に1万人あまり

日本開拓団残留婦人松田ちゑさんの回想録は、すなわち真実に彼女と同胞達が、大羅勒密河(川)を渡った時のその場面の経緯を記録したものである。我々は当時にいったいどれぐらいの開拓難民達が渡し場で亡くなったか合計する術は無いが、1945 年 8 月 15 日から 1945 年 10 月に至る間に方正県伊漢通に滞在した開拓団難民は、約1万余人であることは証明できる。

資料の示すところでは、三江地区西に入った開拓団の総人数は約三万人余である。南の 林口と北の大口洞、小口洞へ行った一部を除いた、その外のほとんど多くは、荒涼とした 山野の奥や、河(川)を渡る中で死亡したとみられる。 1945 年 8 月 15 日以後、ソ連軍は、方正県を接収して管理した。当時の中国共産党民主連軍も方正県に侵入し、共産党と国民党は、方正地区で政権闘争を展開した。方正県に滞在していた方正県の一万余の開拓団難民は、この時は、衣食無援助の時期におかれ、すでに雪が降る時期となった東北で、大量の開拓団難民達はチフスと寒さと飢えの中で、大量に死亡した。中国共産党民主政府が基本綱領を形成した時に全県一般庶民に援助を呼びかけ、人道主義に出た方正人民は、死に瀕する 5000 余りに近い婦人、子供を家に連れ帰り、彼らは中国の家庭で第二の人生を獲得した。

侵略者であり、犠牲者

結論: 開拓団は日本軍国主義中国侵略戦争の中での重要組成部分で、その性質は、侵略の移民であり、中国で家屋を奪い、土地を掠め、軍事侵略の共犯者である。しかし、開拓団は又、日本軍国主義中国侵略の犠牲者である。戦争の後期、日本政府は彼らを遺棄し、数えきれない日本国民を死亡させた。又、侵略された中国の土地に滞在させた。

中国人民の以前の恨みを問題とせず、恨みに報いるに徳をもってする人道主義精神は、 さらに多くの日本国民を、日本政府が残忍かつ戦争に対する極悪で痛覚の思想であること をひどく悲しみ、恨むように認識させた。

意見: 方正県大羅勒密鎮の "死の渡し場" は日本侵華戦争の罪悪の検証地の一つである。およそ死の渡し場で生き残った日本国開拓団の第一代、第二代の人達、以前の苦痛を回想する中で、あなた方の家庭や親族達がどうして日本軍国主義の殉葬品となったのか。

日本の国民たちよ、あの歴史を胸にきざみ、死亡渡し場に永久の祈念碑を建て、今の人に警告をし、未来に呼びかけて欲しい。血で書かれた歴史は、ぬぐい切れないものである事を。

(日本語訳 柏木 真)

(かく・そうせい:農民作家、方正民俗研究会顧問、黒竜江省政治協商会議委員。 せき・きんかい:1957年、中国ハルピン生まれ。2014年1月、夫人(残留孤児)と来日、 東京都に永住。日本残留孤児養父母連絡会・事務局長)

家族の「満蒙開拓」体験に思う

村上 三保子

私の祖父母、父と3人の叔母は珠山上高井開拓団として旧満州宝清県珠山にいました。 そのため私は小さい頃から「満州」という言葉をよく耳にしていました。私は「おばあちゃんが満州にいた頃はね…」という祖母の言葉を日常的に聞いて育ちました。

「おばあちゃんが満州にいた時ね、飼っていた犬が逃げてしまったんだけど、狼を連れて帰って来たんだよ。」などという話を、幼かった私は「満州」と言われてもピンと来ず「昔うちの近所の山で起きた話かな?」くらいの気持ちでぼんやりと聞いていました。

「満州で、義和(私の父)の手を放さないようにして鉄砲の弾の下をくぐって逃げて来たんだよ。」「中国の人に子供を預けて来た人もいたけれど、おばあちゃんはそうしなかったんだよ。」

そのように私に話してくれた祖母がどれだけ悲惨な体験を強いられたのか、私がそれを 理解できるようになったのは大人になってからでした。

私の祖父は、家族を連れておそらく意気揚々と渡満したのでしょう。(生前、開拓団当時の仲間との付き合いや、開拓団の歌(注1)を木材に彫って家に飾り時々歌っていたことからそう感じました。)しかし祖父は沖縄戦に召集されて満州を離れました。

そして私の祖母、父、叔母を含む団に残された婦女子や老人たちは命懸けの逃避行を強いられました。

その時私の祖母は、当時6歳だった私の父を含む4人の子供を連れて逃げました。我が 子の手を放さぬよう、飛び交う銃弾をくぐり抜け、食べ物がない中どなたかから貰った水 筒の水で命を繋いできたそうです。

私の実家の神棚には古い水筒が置かれており、祖母はいつか「満州でこの水筒の水で生きて来たんだよ。だからこの水筒は家の神様なんだよ。」と言っていました。その水筒は祖父母亡き今では、祖父母の遺影と共にお仏壇に置かれています。

逃避行の中、殺戮や殺掠、自決、飢えや寒さ、病気などで沢山の命が失われた事は言うまでもありません。当時幼かった私の父も、仲間が飢えや寒さ、チフスで死に、その死体が野犬に食べられていた状況を目の当たりにしたそうです。

そして私の祖母が連れていた当時1歳だった双子の娘も飢えのために相次いで亡くなりました。

盗賊に遭遇した時、祖母は懐に何かを抱いていました。それが幼子の亡骸だと知った盗 賊は、私の祖母からは何も盗らずに去って行ったそうです。祖母は「盗賊もやっぱり人間 だな。」と話していました。

亡くなった二人の子供はハルピンの地に埋めてきたそうです。

祖母は2007年に93歳で他界しましたが、亡くなる前に私の父を枕元に呼び、二人の娘を埋めた場所を伝え、もしそこへ行かれたらお線香を上げて来るよう託していたそうです。 私が小さい頃からずっと祖父母の部屋には双子の赤ちゃんの遺影が飾られていました。 「満州で亡くなった双子の赤ちゃん。私にとっては叔母さん。」その程度の気持ちで日々 その写真を目にしていました。

自分の子供を手に掛けざるを得ない人たちも沢山いた中で、餓死という最期はまだまし であったのかもしれません。

逃避行の足手まといになる子供を自ら井戸に捨てたもののどうしても気になり、翌日その井戸を覗いたらまだ井戸の中で生きていた子供と目が合い、いたたまれなくなって井戸の中に大きな石を投げ込み、その後は振り返らず走り去った。そういう人もいたと聞きました。

しかしどんな形であれ、我が子を失う悲しさや悔しさは筆舌尽くし難いことでしょう。 祖父母はハルピンの地に埋めてきた我が子の遺影を毎日どんな気持ちで眺めていたこと か。私がその辛さを推し測れるようになったのは祖父母が他界して何年も経ち、私自身が 母親になってからでした。

昭和21年9月、祖母と父と一人の叔母は何とか帰国しました。祖父は沖縄戦に召集されたものの盲腸のために戦闘に加わる事を免れて無事でした。

以上が私が祖父母や父から直接聞いたり、周囲の方から間接的に聞いた話です。私が小さい頃に聞いた話など記憶を手繰り寄せてまとめてみたため、正確ではない部分もあるかもしれません。

なぜ多くの命が失われなければならなかったのか。国策に従った国民をなぜ政府は見捨てたのか。なぜ罪のない子供たちまで犠牲になったのか。そして、中国が払った多大な犠牲、満蒙開拓の悲劇に触れるたびに納得できる事が何ひとつなく、ただただ憤りを覚えます。

「戦争はもはや過去のこと。」今、そうも言い切れない気がしてなりません。戦争も経済至上主義の国策も、最初に皺寄せを受けて犠牲になるのは弱い立場の者です。

子供たちの世代に無責任なバトンを渡さない。それが戦争の悲惨さを家族を通して少しでも知ることが出来た私の役割だと思っています。

注1『珠山開拓団の歌』と思われる。

(むらかみ・みほこ:1974年生まれ、長野県須坂市出身。家族の影響を受けて中国語を学ぼうと名古屋外国語大学中国語学科に進学し卒業。現在、東京都杉並区に在住。東京都日本中国友好協会青年委員会会員)

私にとって「満州」とは何だったのか

――つれづれ思い出すまま<満州覚書>――

篠原 浩一郎

本誌編集人の大類善啓氏と思わぬ出会いがあり、旧満州生まれということもあり、このような原稿を書く羽目になった。本稿はいわば私の満州覚書といったものである。

1938年5月4日、満鉄撫順病院で生まれた私の家族を簡単に紹介しておこう。

- 父 篠原四郎 明治38年(1905年)生まれ、昭和22年(1947年)1月15日死去(大連)
- 母 篠原貞子(旧姓鶴田)大正5年(1916年)生まれ、平成26年5月1日死去(新宿)
- 弟 篠原龍夫 昭和15年(1940)5月14日撫順生まれ
- 妹 田中博子 昭和18年 (1943) 2月1日奉天 (瀋陽) 生まれ
- 弟 篠原昭三 昭和20年 (1945) 10 月大連生まれ、この年の12月8日死去

父四郎は、満州鹿島組取締役土木部長(事務所奉天市弥生町 20)をしており、当時、2 階建て事務所と6家族住宅が一緒になっており、私たちもその1階に住んでいた。

幼稚園は弥生幼稚園、小学校は高千穂小学校(1945年4月入学)、7月転居のため大連市 大広場小学校に転校。1947年3月に引き揚げ、福岡県久留米市立日吉小学校に同年4月か ら3年生として転校した。

40歳の父に召集令状

1944年10月、父親が40歳の時に召集令状が来た。満州の血管ともいえる満鉄の線路の建設保守を担っている満州鹿島組土木部長を召集するところまで日本は追い込まれていた。しかし、徴兵検査で父親に、重度の肺結核が発見され帰されてきた。会社でも放っておけなく、病気療養に専念することになり、暖かい大連に転地療養することになった。終戦直前、1945年7月だった。大連病院の真向いにある我が家の庭に急きょ防空壕を掘り、出来上がった壕のまえで一家は整列して玉音放送を聞いた。

数日前から、いわゆる満人街(中国人街)に青天白日旗が出されているといううわさもあったので、日本は負けたのだと大人たちもがっかりしていた。子供には満人街には遊びに行かないようにと注意があった。しかし町はいつもとおりですぐに変化は現れなかった。相変わらず大連病院の庭でセミを取ったり、山に登って町を見下ろしたりして遊んでいた。大きい子どもたちは満人(私たちは中国人を満人と言っていた)の子供と石合戦をしたとか元気な話をする者もあったが、一年生の行動範囲はそんなに広くなかった。

山で見たなでしこのビロードの触感の花弁の紫がかった赤や、隣の石田さんの門の脇の 露草の深い青色に深い印象を覚えた。

日本の敗戦とともにロシア兵が来た

1945年11月晴れた昼過ぎ、大連の我が家に酔っぱらったロシア兵が二人押し入ってきた。

「ロスケだよ」と私が叫ぶと、母は乳飲み子を抱いて裏口から隣の石田さんの家に逃げ込んだ。ロシア兵は土足で上がってくると居間のタンスの引き出しを全部引き出して、母の腕時計を二つ取ると、隣の部屋に入りベッドで寝ている父を見ると「オーっ」と叫んで逃げ出した。一升瓶に入ったウォッカを忘れて行ったので、後で取りに来られたらいやだから、追いかけて行って返した。見ていると歩きながら腕時計を一つ捨てているので、拾ってみると我が家の時計ではないが、貰って帰った。ねじを巻かないので止まったのを、壊れて使いものにならないと思うらしい。

小学校に来たロシア兵たちは大きな小便器に流れる水で顔を洗っていた。水洗便所を見たことが無いらしい。ロシア語が出来るおばさん達が少年兵をつかまえて話を聞いていると、「お母さんはシベリアのどこかにいるが、お父さんはスターリンでクレムリンにいるのだ」と異口同音に言っている。戦争孤児か囚人の子供たちらしい。日本人避難民に悪逆非道を働いてきたロシア兵だが、大連にはソ連の空軍本部があり、ゲーペーウーがうようよしているので、ロシア兵の乱暴はひどくはないようだった。ゲーペーウーがつかまえたロシア兵の頭を石垣に叩きつけるのを見た事があるし、大広場の大きな楡の木に縛り付けてロシア兵を公開処刑するのを見たことがある。日本の軍隊は中国人の前で日本兵を処刑したりはしないがなあと思って見ていた。大連神社の山に陣地を構築しているらしく、朝、ロシア兵は行列を作って登って行き、夕方にはスコップを担いで帰ってくる。いつも歌を斉唱するのだが、ハーモニーが見事で、大連の夕空に響く歌声に日本人たちはみな外に出て聴き惚れていた。大人になって赤軍合唱団が来ると聞きに行ったが、大連で聞いた時のような感動は得られなかった。大連病院の前庭で、女の上官が男の兵隊を殴り飛ばすのも見た。良く見るとうっすらひげが生えているようだった。

日本人はロシア軍が大連に入場する時は、常会(隣組のような組織)で配られた赤いソ連旗を振って出迎えた。乱暴しないでくださいねという気持ちだった。マンドリンと言われる自動小銃を大勢が持っているので、これでは日本軍は敵わないだろうなと噂している。

国民党軍が入ってきた時は青天白日旗を振り、次は五星紅旗だった。八路軍はズックの 靴を履いていて、行進しても足音がしないし、鍋を背負い鶏をぶら下げている。こんな貧 弱な軍隊にも旗を振らなきゃならないのか、戦争に負けると情けないなあ、と思ったもの だ。将校は朱房のモーゼル拳銃を木のケースに入れていた。

米軍が引き上げを認めないので大連の日本人は1947年になるまで引き揚げができなかった。奥地から続々と逃げ込んで来る避難民は小学校にあふれ、46年の夏から私の通っている大広場小学校は休校になった。その冬は校庭にお墓が並んだ。我が家の前で倒れた避難の男の人に生卵をあげたら吐いてしまった。薄いおも湯から上げないといけないほど飢えているのだ。日本人の間ではコックリさんがはやり、木の棒3本で何時帰国できるかを占う。大人がその結果に一喜一憂しているのを眺めていた。

(つづく)

(しのはら・こういちろう:1938年、旧満州の撫順で生まれる。1960年の安保闘争では 全学連の中央執行委員、社会主義学生同盟の委員長として活動。その後、機械メーカーな どさまざまな仕事に就き、現在はNPO法人BHNテレコム支援協議会理事)

「日本人孤児と中国養父母展」を開催

大類 善啓

ハルビン市養父母連絡会の名誉会長・胡暁慧女史が朝日新聞国際報道部の石田耕一郎さん(前瀋陽支局長)を伴って8月中旬、事務局に来られた。胡さんとは方正でもお会いした仲である。主な要件は、ハルビン市にある「侵華日軍731部隊罪証陳列館」に常設されている日本人孤児を育てた中国養父母の写真展を日本で開催したいということである。開催時期はなんとしても11月初旬を希望するという。少々慌てたが、日本教育会館1階のギャラリーがちょうど空いており、11月11日から16日まで開催することに決めた。

パネル写真展のタイトルは、「日本人孤児と中国養父母歴史展―国境を越えた養父母の愛―」である。主催は中国側がハルビン市日本人孤児養父母連絡会、黒龍江省社会科学院歴史研究所、日本側が一般社団法人日中科学技術文化センター、協賛が黒龍江省教育出版社、満蒙開拓平和記念館、中国帰国者・日中友好の会、そして方正友好交流の会である。

11月11日(水)午前11時からの開幕式では、まず来日された養父母連絡会の副会長である金成民氏、次に日中科技文化センターの凌星光理事長、満蒙開拓平和記念館の寺沢秀文専務理事、そして中国帰国者・日中友好の会池田澄江理事長から挨拶を受けた。また、黒竜江省社会科学院東北アジア研究所日本研究室主任の杜穎女史から、会場にいた日本人孤児へのねぎらいの言葉があった。通訳は張荻女史、司会進行は大類が行った。

開幕式には50人近い人々が参加した。挨拶のなかで凌理事長は、日本人孤児を育てた中国養父母を通して、日中友好の動きが深まる契機にしてほしいと語った。当日は朝日新聞、朝日小学生新聞、信濃毎日新聞、その後もNHKテレビなどの取材があった。東京新聞を含めたこれらのメディアの報道などで連日、この催事を知った人たちが参観され、いろいろな出会いがあった。

本誌8頁に掲載されている村上三保子さんの原稿は、このような出会いから生まれた。 これ以外にも、いわば一期一会とも呼べるような、予想外の出会いが生まれたことは嬉し いことだった。

これからの展望のひとつに、この展示会を、「どうして日本人残留孤児が生まれたのか」という意味で、戦争を知らない若い人たちに知ってもらうためにも、全国的に開催したらどうかという意見が出ている。今回の場合は、中国で展示されていたものを日本向けに編集したものであったが、全編を通して展示会に流れているトーン(調子)は、「死ぬかもしれぬ日本人孤児を国境を越えて育てた中国養父母の愛」という美談である。

確かに敵国だった国の孤児をこのような形で引き取り育てた例は他に見ることはないかもしれない。しかし、孤児たちすべてが愛情深く育てられたわけではない。中には養父にいじめられたり、実の子と違って学校へも通わせてもらえず、小さい時から働きづめだったという例もある。15 頁に掲載されている田村美佳の小論はそれに言及しているという意味でもぜひ一読してほしいものだ。仮に我々が、全国的に展示会を開催する場合は、単なる美談だけに終始するのではなく、不幸な状況に陥った孤児が苦難にめげず、たくましく生き延びた魂を表現できるような展示会にしたいと思う。

(次頁以下の写真は赤間基代と大類が撮った)

「日本人孤児と中国養父母展」スナップ写真



開幕式で挨拶するハルピン市養父母連絡 会副会長の金成民氏



凌星光・日中科学技術文化センター理事長



右から寺沢秀文・満蒙開拓平和記念館専 務理事、小林勝人・飯田日中友好協会理 事長、大類善啓、通訳の劉荻さん、 凌星光、金成民氏ら



孤児でもあった「中国帰国者・日中友好 の会」理事長の池田澄江さん



開幕式に詰めかけた人たち



パネル写真展の光景



展示されていた池田澄江さんと彼女の養母・崔志栄さん



方正で幸せに生きのびた日本人孤児



日本の子供たちを救いだした聶栄瑧将軍



肖平将軍は日本人孤児を引き取り育てた



孤児だった中島幼八さんも参観に訪れた



NHK テレビの取材風景

「日本人孤児と中国養父母展」をどう見るか

一戦後70年、いま2つの「もしも・・・ならば」を巡る若干の考察―

田村 美佳

先般、神田の一ツ橋画廊にて「日本人孤児と中国養父母」と題する写真展が行われた。この展示会は、中国・ハルビン市養父母連絡会が主催する「中国養父母常設展」の内容を、日本国内展示用に編集し、パネル 20 数点に内容を凝縮したものである。本展示会の特徴は、過去の歴史に思いを馳せ、中国(旧満州)で「日本人孤児」となった現役世代、もしくは、同じときを生きた世代、さらには、我々後世の世代に向けて、メッセージ性の強い企画構成となっており、注目すべきは、現役世代の来場者間の交流・情報交換の場、というシンボリックな場として機能していたことである。

本展示会の主旨に関しては、歴史との関わり方に依拠されるところが大きく、人の数だけ答えがあると考えるため、敢えて明確にしないが、筆者が現場で受けた感触としては、パネル写真が語るように、また、何より、生きた証人である来場者の証言に見るように、終戦から現在にかけて、中国養父母の日本人孤児に対する惜しみない愛情は、紛れもない事実として存在し、現在でも、彼らの胸の内には、確かな記憶として、忘れられない感謝の念で一杯であることが見受けられた。もっとも、日中両国の立場の違いはもとより、日本人孤児と中国養父母の関係性については、各家庭で事情が異なることが容易に予想されるため、美談の象徴としての、「中国養父母の日本人孤児に対する深い愛」のみに焦点を当てる訳にはいかないが、ここで以下2点について問題提起してみたい。

1、果して、立場が異なった場合、すなわち、70年前に、日本が勝利し、疲弊した戦地で中国人孤児が日本人に助けを求めていたと仮定する場合、我々日本人は、かつての中国養父母のように、彼らに惜しみない愛情を注ぎ、我が子同然に育てあげることができたであろうか。

2、さらには、自分を現役世代と仮定して、ある日、突然、異国の地(ここでは旧満州を 想定)で日本人孤児と化してしまった場合、我々はどのように生き抜いたのであろうか、 そこには、希望を見出せる要素やプロセスが備わっていただろうか。

これらの問いに対する回答は、あくまでも、仮定に対する考察に止まるため、限定的であり、現実味に欠けることは言うまでもない。しかし、これらの問いに向き合う際に、揺るぎない史実として存在する「戦争」という歴史の過ち=我々のコントロールの範疇を超えた外部要因に改めて着目した場合、我々は、70年前のあの日、一体、どのような心情に駆られ、どのような行動を起こしたのだろうか。ここに、本問題提起を考察する真意があると筆者は考える。

さて、前置きが長くなったが、本展示会の開催にあたっては、偶然なのか綿密な計画が あってのことかは把握し兼ねるが、戦後 70 年の今年、安倍談話の内容を反映してか、上述 の問題提起を一考するのに、機が熟した運びとなった。筆者の本展示会への参加経緯に関しても、時を得たかのように、巡り巡って、日本側主催である一般社団法人日中科学技術文化センター理事の大類善啓氏(方正友好交流の会事務局長)に声をかけられ、暫しの日程ではあるが、運営事務局として、参加させて頂いたのである。

今回、事務局として参加させて頂いたことのメリットは計り知れないが、特筆すべきは、現役世代を中心とする来場者より、折に触れて、生の言葉で当時の体験記を拝聴することができたことである。少し説明を加えると、ここで言う「現役世代」とは、内実は、①元日本人孤児、②僅差で日本人孤児とはならず、母親に手を引かれて日本に引き揚げてきた方、③満州国に渡った訳ではないが、戦争を体験した同世代として、本問題に深い関心を寄せる方の3パターンに大別され、彼らは、それぞれの立場から当時を振り返り、実体験を交えて、上記2つの問いに対して、思いを巡らせておられた点が非常に印象に残った。彼らの証言は、「多くの体験の一つ」に過ぎないのだが、目を見張ることに、共通して、平和への祈りや、中国養父母に対する深い感謝の念で統一されており、ここに、現役世代を代表する確乎たる思いを垣間見ることができたように思う。

では、結びに向けて、論点を整理してみよう。

- 1、終戦のあの日、日本が勝利していたら、我々は、かつての中国養父母と同様に、中国 残留孤児に手を差し伸べることができただろうか。
- 2、仮に、自分が、異国の地で日本人孤児と化してしまった場合、我々はどのように生き 抜いたであろうか、その術はあったのだろうか。
- 3、今後、我々は、戦争という過去の教訓に何を学び、どのように活かしていくべきか。
- 4、方正の活動を今後どのように展開していくのか。敗戦国の日本が主体的に活動を展開していくことの意味を今一度見直す必要性があるのではないか。

先に結論を述べておこう。これら4つの問い及び展望には、正解は存在しない。なぜならば、これらの問いの本質は、世代を問わず、各自が自らの問題として、歴史を振り返り、真摯に向き合ってこそ、ヒントという名の片鱗が見出されると考えるからである。したがって、「過去の歴史から何を学び、後世に何をどのように伝えていくか」という命題は、我々の意識や関心に大きく左右されることは自明であろう。

最後に、戦争体験のない、若い世代を代表して一言述べておこう。

現代中国において日本を想起させる言葉には、戦後70年経った現在でも、「盧溝橋」や「日中戦争」、「日本鬼子」という言葉が語り継がれていることは筆者の実体験からも否めないが、我々は民際交流を通じて、関係性を改善できる可能性を多分に秘めていることにも着目し、筆をおきたい。

日中がアジアの架け橋となれることを期待して

(たむら・みか:1982 年、福井県生まれ。学生時代にドキュメンタリー番組『小さな留学生』を見て、中国と出逢う。20歳のとき、1年間の杭州留学を経験。以来、「私はアジア人」を基本マインドに、日中の平和について思いを寄せる)

母の愛は永遠

中国養父母写真展 東京で開催

石 金 楷

■ 「養父母の写真は初めて…」

2015年11月11日から16日まで、中国ハルビン市日本残留孤児養父母連絡会、黒竜江省社会科学院、日本日中科学技術文化交流センターが主催し、中国帰国者日中友好の会、長野県満蒙開拓平和記念館、方正友好交流の会が協賛する『中国残留孤児養父母写真展』が東京都千代田区の日本教育会館で開催された。中国紅十字報、朝日新聞、信濃毎日新聞などがこれを伝えた、多くの参観者から「残留孤児のことはよく知っていたけど孤児を育てた中国の養父母の具体的な映像を見るのは初めて。とても感銘を受けた」という声が聞かれた。

■120枚余の映像

写真は5つのグループに分けられる。「日本の中国への移民」、「遺棄された日本の移民」、「中国養父母の大きな情愛」、「孤児たちが伝える中国の養父母」、「中日友好の懸け橋」である。120 枚あまりの歴史的な映像と1万字に近い写真説明が、日本の中国への移民、敗戦後中国の養父母が孤児たちを収容した感動的な経緯、孤児たちが中国の養父母に寄せる感謝の気持ちを紹介している。

■ 来場者の声

展示された写真を見た日本の来場者たちは「この展覧会を通じて、当時の日本政府の移民による中国侵略政策、敗戦後日本の難民が味わった苦難と、中国の民衆が、恨みを徳にかえて日本の民衆を引き取り、育てた博愛主義を知ることができた。私たちは中国の養父母に深い敬意と心から感謝の気持ちを伝えたい」

と語った。何人かの孤児たちはこう語った。

「この展覧会の映像は私たちの心の声を語っている。私たちが味わった悲劇を2度と繰り返してはならない。日本と中国が永久に友好を続けなければならない」

埼玉県に住む、ある孤児はこう語った。

「戦後70年に、このような写真展をやることは大変、意義のあることだ。今日は子供たちを連れて見に来た。それは子ども達に歴史を忘れず、戦争の残忍さと中国の養父母の恩を忘れさせないために」

この写真展は東京のあと、また長野県の満蒙開拓平和記念館に戻り、約2ヶ月間、開か

れる予定である。

中国養父母写真展に感あり

石 金 楷

日本遺孤

残留孤児

梦砕満州夜茫茫 哀鴻遍野難望郷 凄風苦雨逃難路 生離死別慟断張 人神共憤恨侵略 植民苦果終自嘗 白山黒水有大愛 以徳報怨美名揚 夢、満州に砕け、さすらうばかり 悲しみの雁、帰る里も見えず 逃げる行く手塞ぐ風雨と飢餓 生別、死別、慟哭果てもなく 侵略恨む、神も人も 植民の苦渋を自ら嘗める 東北が差し伸べる無辺の愛 恨みに報いるに徳をもって包む

中国養父母

中国の養父母

春風化雨潤無声 含辛茹苦育狐情 中日結得邦交好 揮泪送子帰東瀛 永夜難消慈母泪 越洋頻伝鴻雁情 感天動地真情在 世代友好是心声 春風が吹いて潤いの雨 育ての苦労も今は昔 中日国交回復を迎え 泪を拭って孤児を送る 慈母の涙は消えず長い夜 海を越えて通う雁の思い 天地を動かす真ごころあり 世代を超えた友好こそ心の叫び

(日本語訳 奥村正雄)

中国残留孤児の生活伝える

養父母との歴史 千代田でパネル展

ら始まった。 展が、千代田区一ツ橋2丁 との歴史を紹介するパネル 日の日本教育会館で11日か 本人孤児と中国人の養父母 戦後、中国に残された日

約30枚が並ぶ。 当時の歴史的な背景や家族 の暮らしを説明するパネル 児や養父母の写真のほか、 で活動する「残留孤児・養 養父母連絡会が所蔵する孤 父母連絡会」などが企画。 ーや旧満州の中国黒竜江省 日中科学技術文化センタ

> 国で暮らした。 NPO法人「中国帰国者

い若い世代の人たちにぜひ 歴史の証人。戦争を知らな ラにする。

孤児や養父母は 気持ちで愛してくれたから は 見てほしい」 今の命がある」と涙ぐん 「中国の養父母が温かい 11日に来場した池田さん 「戦争は家族をバラバ

295.0411) ° 技術文化センター(3・3 展示は16日まで。 問い合わせは日中科学

来場者にパネルの説明をする池 田澄江さん(左)=千代田区

> 歳で日本に帰国するまで中 省の生まれ。生後10カ月で 中国人養父母に託され、 池田澄江さん(71)は黒竜江 ・日中友好の会」理事長の

阿智の満蒙開拓記念館など協賛 「残留孤児と養父母」都内で展示



田澄江さん(右)=11日、都内 歴史展の開会式であいさつする池

の男の子を見つけて引き取っ

べた。同記念館の寺沢秀文専 関係には)風雨があったが、 会の金成民副会長は「(日中 孤児ら30人余が出席。 同連絡 た話などを紹介している。 育ててくれた養父母にお礼を 侵略者でもある日本人の子を 交流史上の重要な部分」と述 中国の母と孤児の物語は日中 言いたい」と述べた。 務理事は「中国側から見れば 開会式には首都圏の元残留

えてほしい。戦争は家があっ 孤児の歴史が生まれたかを考 かに悲しいか。なぜ養父母と からないことが人間としてい てはいけない」と話した。 ず、みんな苦しい。絶対にし 求めた訴訟の原告団代表だっ 分からず、自分が誰なのか分 は、取材に「親や自分の名が 分な自立支援策を怠ったとし ても帰れず、親がいても会え た池田澄江さん(71)=東京= 早期帰国措置や帰国後の十 元残留孤児が国に賠償を

廊で始まった。養父母の生活

教育会館1階にある一ツ橋画 LI日、東京都千代田区の日本

台としたい考えだ。

会場には写真付きパネル26

省ハルビン市日本孤児中国養 支援をしている「中国黒竜江

父母連絡会」などの主催で、

婦の話や、中国人が凍死寸前 い子どもを託された中国人夫 枚を展示。日本人女性から幼

6月にハルビン市で同連絡会

歴史展は、同記念館が昨年

は16日まで開き、今月21日か 学したのがきっかけ。都内で が設けている養父母展示を見

ら12月26日までは同記念館で

展示する。

孤児と中国養父母歴史展」が 母の歴史を紹介する「日本人

中国残留孤児と中国人養父一下伊那郡阿智村の満蒙開拓平

和記念館などが協賛した。養 父母と孤児の歴史に光を当て て不戦を誓い、日中友好の土

(公社) 日中友好協会発行「日本と中国」2015年12月1日付

写真パネルを熱心に見る来場者



展示された写真パネル

に、日本人の旧満州(現中国東 れた。(一社)日中科学技術文 国人に育てられた人々のこと。 中で帰国を果たせず、その後中 世界大戦が終結した1945年 館、NPO中国帰国者・日中友 交流の会、満蒙開拓平和記念 北部)からの撤退・引き揚げの 連絡会などが主催し、方正友好 化センターとハルビン市養父母 代田区の日本教育会館で開催さ そのほとんどが「満蒙開拓 711日から16日まで、東京・千 日本人残留孤児とは、第二次 東京

好の会が共催した。

の逃避行中に親から手放され、 民」であり、ソ連軍の侵攻から 専務理事は、11月21日から12月 満蒙開拓平和記念館の寺沢秀文

ちの成長の物語、肉親を見つけ の一部で、訪れた人たちは 市内で常設展示されているもの を引き取ったいきさつ、孤児た ン市養父母連絡会が所蔵し、同 が展示された。いずれもハルビ とが紹介する写真パネル約30枚 た孤児との別れや現在の状況な 会場には、養父母たちが孤児

中国人養父母に託された孤児た

長が「戦後70年談話の中で安倍

ずつを熱心に見て回った。

技術文化センターの凌星光理事

11日の開幕式では、日中科学

26日まで同記念館内で同様の写 母を知るシンポジウム」を開く 阿智村中央公民館で「中国養父 真展を行うこと、12月12日には ことを紹介した。

知ってほしい

中 日本人孤児を育てた 養父母の 歴史

中国大陸に残された日本人孤児

70年前の日本の敗戦により、

と、孤児たちを育てた中国人養

狐児と中国養父母歴史展」が11

文母の歩みを紹介する 「日本人

・ **催** ルビン市社会科学院の金成民氏 中 **惟** ルビン市社会科学院の金成民氏 い」と述べた。 い。写真展を通じて養父母たち の知られざる歴史を知ってほし 国側を代表してあいさつしたハ きたい」とあいさつ。一方、中 風になる。よりアピールしてい を示した。私たちの活動に追い 首相は養父母への感謝の気持ち

また、長野県・阿智村にある

今から7年前に戦争が終わ

東京都千代田区の日本教

中国残留孤児の歴史 知ってほしい



パネル展示を終えた関係者のみなさん。日本に住む孤児やその家族も手伝いました =10日、東京都千代田区の日本教育会館

孤児だった兄を持つ石金楷さん

兄のかせぎで文房具 幼名を「幸福が来た」と

ちや養父母の歴史を、語り継 いいます。こうした子どもた ました。「中国残留孤児」と では多くの日本人の子どもた がいます。 ちが親とはぐれて孤児になり った前後の混乱で、中国大陸 いでいこうとしている人たち (編集委員・別府薫)

養父母との歩みを展示・東京



日本孤児中国養父母連絡 省の民間団体「ハルビン市 育会館で11日、「日本人孤 会」などが主催。孤児や養 始まりました。中国黒竜江 児と中国養父母歴史展」が

阿智村の満蒙開拓平和記念 から12月下旬まで、長野県 パネルで紹介しています。 館でも開かれる予定です。 展示は16日まで。11月21日

混乱の中置き去りに

北部は、かつて「満州」と いう国でした。1932年 ハルビンがある中国の東

てつくった国で、政治の実 に日本軍が後ろだてになっ

父母たちの歩みを約3枚の 平洋戦争へと続く長い戦争 立を深め、日中戦争から太 かけで、日本は国際的に孤 られます。このことがきっ れる移民が開拓団として送 農村から約27万人ともいわ 業が進出し、日本の貧しい 権もにぎりました。日本企

終戦直前の45年8月8の時代に入っていきます。 別の文めこんできました。と)が日本に宜戦布告。満 日、ソ連(いまのロシアな

東北部中心に3千人

を確認。このうち1284 これまで2818人の孤児 肉親をさがす取り組みが始 孤児たちが日本を訪れて、 まりました。日本政府は、 81年、30~40代になった とができた事実」を心にと し、再び祖国の土を踏むこ どめ、感謝の気持ちを表し たいと述べました。

して孤児が生まれたので いと親が中国人に預けたり り、何とか生きのびてほし 逃げる途中に親とはぐれた

す。2556人が帰国し、 人の身元がわかっていま 人にのぼります。

にされた3千人近い日本人 の子どもたちが、無事成長 のなかで「中国に置き去り 日に発表した戦後70年談話 家族をふくめると9377 安倍晋三首相は、8月14

敵国の子を育てた大きな愛

す―展示会のパネルから たりともすでに亡くなっていま 孤児を育てた石さんの両親。

苦しんでいる姿を見かねた 炎をわずらい高熱と下痢に 容所で身よりがなく、胃腸 った日本人孤児でした。収 理工をしていた石さんの両 兄さんがいました。靴の修 には、15歳年上の義理のお る石金楷さん(8歳)の家 親が、終戦の翌年に引き取 連絡会で長く活動を続け のころから工場で働きまし い家計を支えるために10代 けられたお兄さんは、貧し て兄がそろえてくれた」と た。石さんは「私が学校で いう意味の「来福」と名づ ふり返ります。 使うノートも鉛筆も、すべ お兄さんは身元がわか

り、1986年に日本に帰

手伝い、孤児や養父母に話 絡会で孤児の肉親さがしの んはお母さんとともに、連 国しました。その後、石さ

日本向けに編集したもので 回の展示会は、その内容を ビンで、孤児や養父母の写 を聞く活動などを続けてき 真や記録を展示する「中国 ました。2012年にハル 養父母常設展」を実現。今

これまでに石さんが知り ましたが、2世、3世の世 料を集めることが目標で いまは日本語を学び、さら の子どもたちにも、まず歴 に多くの孤児や養父母の資 れるはずです」と石さん。 帰国後に言葉などで苦労し 史を知ってほしい。 孤児は 代は日中友好のかけ橋にな

という言葉を浴びせられた 『中国から何で来たんだ』 「3世の子どもが学校で

という話も聞きます。日本

次の世代はかけ橋に

合った孤児は150人近 く。去年から、妻で日本人 孤児の芝田桂子さん(75歳) と東京で暮らしています

孤児や養父母の調査を続ける

中には親や祖父母が孤児で たちの暮らしは国の保護が かわらず、日本人孤児を育 あることを知られたくない ある一方で、2世、3世の ます。また、日本での孤児 えたい」という思いがあり てた養父母の大きな愛を伝 人がいるといいます。 石さんには「敵国にもか

網博週報

第466 号

2015年11月27日 金曜日 農歴乙未年十月十六 毎週金曜日発行

半年購読料: 5000円 年購読料: 9000円

■株式会社 網博新聞社 地址: 〒171-0021 東京都豊島区西池袋3-25-15 IB第一ビル3F ■編集部: 03-5960-5922 ■振込み先:①三菱東京UFJ銀行 西池袋支店 番号:(普) 0541121 ②三井住友銀行 池袋支店 番号:(普) 3354790

广告部: 03-5960-5921 FAX: 03-5960-5923 ③みずほ銀行 池袋西口支店 番号:(普)1647246

携帯: 090 口座名義ノ

《日本人孤兒和中國養父母》展在千代田區的日本教育會館隆重舉辦





《日本人孤兒和中國養父母》展在千代田區的日本教育會館隆重舉辦

活

本報記者 小峰 / 11 月 11 日—11 月 16 日,由日中科學技術文化中心和舊滿洲的中國黑龍江省殘留孤兒養父母聯絡會共同舉辦的《日本人孤兒和中國養父母》展在千代田區的日本教育會館隆重舉辦。

本報記者作為殘留孤兒的三世,抱 着復雜的心情對這次展會進行了采訪。

1937 年開始日軍為了鞏固自己在中國東北三省的地位,并能讓在本國生活不富裕的國民能夠有屬于自己的土地,實行了"開拓團"政策從那時開始日本各地的生活艱苦的老百姓組成團體來到東北三省實行"開拓",隨着 1945 年日本的戰敗"開拓"的日本平民被日本政府和日本軍無情的拋弃在"寒冷的東北三省",在這一年未滿 13 歲的日本孩子就被稱為"殘留孤兒",當然同時還有相當多的"殘留邦人"和"殘留婦人"。

殘留孤兒的定義

殘留的日本人在中國半個世紀的生

被母國所抛弃是多麼的絕望 被親生父母手送人是多麼的無助 被天上的轟炸機追襲是多麼的恐懼

在這絕望的時刻,一個個又被善良的中國人收養,這是什麼樣的感受,中國的養父養母就是他們的再生父母,終于他們有了"家",隨着中國的解放、文革、中日建交、改革開放這個特殊的群體在中國的各地過着他們平淡而又幸福的生活。

回到日本的後半生的生活

隨着中日兩國建交,中日關系正常 化"殘留日本人"這個特殊群體陸續回 到了日本,當回到了自己所謂的祖國的 時候他們哭了,他們為了有生之年能回 到祖國而哭,他們為了還能看到自己的 親生父母、兄弟、姐妹而哭,他們為了把他們撫養成人的中國養父母而哭,他們為了人生所受的委屈和不公而哭,平平淡淡的過完自己的後半生,這就是我們的夢想。

"殘留" 這個特殊的群體存在 的意義

"殘留邦人"、"殘留婦人"、"殘 留孤兒"、"殘留二世"、"殘留三 世"這是一個特殊的群體,說它

特殊是因為它是人類戰爭的產物,說它 特殊是因為這個群體裏的人他不知道自 己的母國到底應該屬于哪裏,說它特殊 是因為從某種程度上是被人歧視的,不 管是在中國還是日本,說它特殊是因為 他們所受到的補償和所失去的是不成比 例的!

說它特殊是因為中日友好無論到什麼時候都離不開這個群體,說它特殊是因為他們是勇敢的,自強不息的,他們一無所有的被拋弃在中國,可他們能夠頑強的活下去,他們背着一個行李箱回到了日本,通過自己的拼搏走上了成功之路。

戰爭的產物不僅僅是"恐怖"、"難 民",還有這個特殊的群體,"殘留"為 了讓這樣不幸的群體不要再出現請讓我 們用自己的力量去維護和平吧!請相信 我們民間的力量大于一切,中日友好是 我們最大的使命!

満蒙開拓平和記念館

降に、中国養父母を紹介するパネ 同館で上映する。 また11月中旬以 当時を知る古老、未認定残留孤児 残留孤児を育てた中国人養父母や 中国東北部の旧開拓地を訪問し、 館はこのほど、4泊5日の日程で ル展示を企画している。 言は今後映像などにまとめられ、 などの聞き取り調査を行った。証 阿智村駒場の満蒙開拓平和記念

預けられて育った。日

本の敗戦時、20歳で子

き取りのために訪中し 得て中国側の証言の聞 だったが、今回は中国 回は旧開拓地の訪問や 2回目の訪中調査。前 養父母連絡会の協力を 人タッフの研修が目的 昨年6月に引き続き ープ「ピースLab フやボランティアグル き取りを行った。 運河県、ハルピン、長 春などで4人ほどの聞 9人が参加。方正県、 外の開拓団関係者など 0.」のメンバー、県 このうちハルピンで

娘に伝えた。結婚して

帰国事業が始まると、

日中国交正常化後に

の出身で清国崩壊後、 いた。李さんは満州族 目らも両親を亡くして ん(9)から体験談を聞 帰るのが幸せだ」と快 く送り出した。 両親を見つけ、祖国に

り返った。 くことができた」と振 父母も高齢化している を感じさせられた。養 国の養母の愛情の深さ れだと思って育てた中 は一敵国の子どもを哀 館の三沢亜紀さん(48) が、直接本人の声を聞 聞き取りを行った同

もに育てた。翌年、日 の子を預かり、夫とと は5歳のやせ細った女 どもがなかった李さん

本人引き揚げ時に本当

国を隔てた遠方の地と 70年が経過したことや いこともあったとい ように成果が得られな いうこともあり、思う 一方、調査では戦後

でなく、中国側の証 務めた寺沢秀文さん (61) は 「日本側だけ

も続けていきたい」と 言、資料の収集も必要 だ。難しい部分もある 話していた。 がこうした調査を今後 う他、中旬以降に同館 も行った。11月11日か れる養父母展の日本開 1部隊記念館に展示さ でもパネル展示を行う ら16日まで、東京の日 催について打ち合わせ 本教育会館で展示を行

養母の李さんと訪中調査団の一行

拓地 C 開 取

さなかったという。 の両親が来たものの渡

目らの人生と育てた娘 帰国を選択。李さんは、 日本の肉親が見つかり 子どももいたものの、

調査には同館スタッ

は、養父母の李淑蘭さ

今回の訪中では73

訪中調査団の団長を

新中国で体験したこととは・・・

----1946 年~1969 年、文革初期まで中国に住んでいた私----

おかざき ゆたか **岡崎** 温

(公益社団法人 日中友好協会理事長)

≪解説:この岡崎温さんの講演は、今年(2015年)6月7日、方正友好交流の会・第11回総会後に行われたものである。岡崎さんは1946年、日本敗戦後の中国・長春で生まれた。旧満州にいた日本人が日本に帰国し始めの頃だが、岡崎さんはお父上の関係で、中国に残り、そのまま中国で学校生活をされたという非常に珍しい体験の持ち主である。機会があれば、一度ゆっくりと中国での生活などをお聞きしたいものだと思っていたが、このよう

な形でお話を聞けたのは良かったと思う。

▼

岡崎さんはこの講演で、1969年に帰国 されるまでのことを縷々語っていただい たが、帰国後のことは語られていないの で、ここに簡単に記しておこう。

岡崎さんは、帰国後すぐに日中友好運動に携わろうと、1969年秋には日中友好協会に入り活動を開始。71年には愛知県日中友好協会の専従職員になり、名古屋



で開催された「第31回世界卓球選手権大会」に携わった。いわゆる<ピンポン外交>と呼ばれた歴史の転換点に立ち会われたのである。その後、事務局長になり、2014年には公益法人日中友好協会の理事長に就任され、今なお日中友好運動の第一線に立たれている。

(大類善啓記)≫

■ 中国生まれ、中国育ち

ただ今ご紹介いただきました岡崎温と申します。本日、方正友好交流の会にお招きいただきまして誠にありがとうございます。現在、日中関係は大変厳しい環境にありますが、日本の全国各地にいろいろなグループがあり、いろいろな団体があって、みな一生懸命、中国との関係改善を図ろうと、歴史を忘れないようにと、頑張っておられることを見て、大変嬉しく思いますし、また感動もいたしました。

私個人は、先ほど司会者からご紹介がありましたが、中国の長春というところで生まれて、その後 1969 年に帰国するまで、一度も日本の土地を踏んでいません。日本に帰ったことがなかったのです。1969 年の 9 月に、初めて祖国であります日本に帰ることができました。そういう人間であります。先ほどからいろいろな報告を伺い、また資料も見せていただき、だいぶ前に大類さんから今日はぜひ講演をお願いしたい、とのお話をいただきまし

たが、私の話を聞くよりも、皆さん方は大変な先輩方で、いろいろと中国との関係も持っておられる。またこれまでの総会では錚々たる先生方が講演をされていますが、私は皆さんの前に立って講演をするような人物ではありません。ただ、皆さんがご興味をお持ちのこと、こういうことを聞きたい、ああいうことを聞きたいと、質問形式であげていただいて、お答えする方法でお話しをさせていただければと思います。皆さんのお時間を無駄にしてもいけませんので。では、大類さんお願いします。

■ 日本敗戦直後の長春で生れる

大類: 岡崎さんの非常に貴重なご経験をお聞きしたいと思います。1946年に長春でお生まれになって、お父さんの関係でそのまま中国に残られた。1969年に日本に帰られて、その時は日本語もほとんどできなかったと伺っています。最初に、なぜ中国で生まれたのか、お父さんの関係とは思いますが、その辺からお伺いできますでしょうか?

岡崎: 私の父は 1942 年に中国に渡りました。当時満洲に満映(満洲映画協会)という映画会社があり、そこに勤務をしていて私も長春で生まれました。父は日本の早稲田大学におり、当時としては比較的進歩的な思想を持っていたようです。当時は特高というのがありまして、進歩的な人間にはうるさくついてまわる。まず大学を卒業する前に捕まって卒業ができなかった。また、出身は九州なのですが、実家からも勘当されて、就職先も 2、3ヵ月勤めるとすぐに特高がきて「この男は危ないぞ、そのまま雇ったらあなたの会社も危ない」と圧力をかけられて、日本では就職できないという状況でした。たまたま同級生の方が当時、満映といった会社に就職していて、満洲の長春に来れば大丈夫だ、私が保証する。ぜひ長春にいらっしゃいということで行くようになったんです。

当時、私の母は身体が非常に弱く、母の家が医者だったこともあり、とにかく「外国へ行くな、中国へ行くな、行くと生きて帰って来られない」と親戚からは言われたようでしたが、私の両親は姉を連れて中国に行ったわけです。

1945年に、いわゆる抗日戦争が終了し、日本との戦いは終わりましたが、中国共産党と国民党とは戦いがあり、満映という映画会社も一応、解放軍である中国共産党が受け継ぎ、その支配下にあり、映写機などの機械を持って解放軍とともに東北各地に転々としました。私は小さくて記憶がないんですが、映画会社の宿舎で生まれ、覚えているのはとにかくいつも荷物を持ってあちこち移動していた記憶しかありません。

新中国成立後、日本人の関係者は鉄道部の人が多くて、日本人学校というのがありました。私の父はその学校の先生になるために北京に行き、私も一緒に北京に行きました。1年ぐらいしてその後、父が河南省の鄭州にある鉄道部の日本人の中学校の先生として来ていただきたいというので鄭州に行きました。それも1年ぐらいです。

■ 母、帰国前の死

1953年(昭和28年)、日本人の引揚げ者の第一陣は数百人、あるいは千人かもしれない

ですが、たまたま私の家庭も抽選で当たって、第一陣で1953年に帰国する予定だったんです。一生懸命、家で帰国の準備をしていたんですが、母は体が良くない。今ならいい薬があるけど当時はない。それで肺炎になり、肺炎の薬は半年後に開発されたんですが、間に合わなかったでしょう。その帰国準備のために疲れて亡くなったんです。

父は、9歳の姉、7歳の私が小さくて、男一人で日本に連れて帰るのは大変だったということで、暫定的に中国に残ろうかと思ったら、ご存知の方も多いかと思いますが、中国の中日友好協会の初代秘書長である趙安博先生が「ぜひ北京にいらっしゃい」と言われたわけです。

当時、中国政府としては、日本との交流を将来は再開したい。また日中関係は大事だということで周恩来総理は日本語のスタッフを、幹部を養成しないといけないというので、北京大学に東方学部というのがあり、アジア・アフリカ系のいろんな学科の中に日本語科をつくり、日本語のスタッフを養成しようとしたのですが先生が足りないので、父に大学で教鞭を取ってほしいということで北京に行くことになり、私も行くことになりました。

鄭州の日本語学校の小学校では周りが全部日本人ですから、私は中国語が分かりませんでした。1953年、日本人が引揚げるというので生徒も少なく、小学校は一年の時に閉鎖したんです。成り立たなくなったんです。

中国語が全くわからないので、北京の小学校の授業にとても出られないということで、 半年ほど保育園に行きました。子どもは言葉を覚えるのは早いんですね。半年ぐらいで日 常会話などは聴きとることはできるんです。ただ日本人として子どもの頃から中国語を知 らないから、どうしても最後まで中国語のレベルは中国の人に追いつけない。だから最後 まで中国語のレベルは低いですね、それはずっと続いていますね。努力も足りないし頭も 悪いかもしれないが、1953年から1969年9月の帰国まで北京で学校生活を送りました。

■ 父と帰国

父は 1953 年から 71 年まで北京大学で日本語の教鞭を執りました。当時はまだ日中国交正常化はされておりません。また中国自身も、中国の有名な考え方として、<自力更生>ということで外国の援助は必要ない。従って外国人はできるだけ帰国しなさい。専門家でも帰国しなさいという考えです。ただ一部の国、当時は反共の国が多くて、タイだとかインドネシアとか、共産党を弾圧するような国の先生は帰国すると逮捕されるんです。それでこのような国の人たちは帰国しなくてもいい。日本人はそういう意味では逮捕されることはないから「帰りなさい」と言われました。

本当は、父はもう少し中国にいて、文革がどの方向に行くか、もう少し知りたかった。 2、3年も滞在したら、その方向もはっきりするだろうと思って、もう少し中国に居たかったんですが、帰りなさいということで一旦、日本に帰りました。

1972年に国交正常化され、大使館が東京で開設されました。その大使館の職員や外交官の半数近くが父の教え子なんです。そうしたら、ぜひ岡﨑先生にもう一度北京大学に戻っ

てほしい、ぜひ教師をお願いしたいという要請があり、1973年の4月に再び、北京大学に 着任しましたが、1999年8月31日に亡くなるまで北京で教鞭を取り生活していました。

教え子の中で一番えらい人は、みなさんもご存知の唐家璇先生ですね。後は、大使になった徐敦信先生、中日友好協会の副会長をやっている王効賢先生などたくさんいます。そういう関係もあって私も親の力ではありませんが、比較的、交流事業もやりやすいということがあります。

■ いじめられずに過ごした学校時代

大類:北京大学の付属小学校に入学された時代はどのような生活でしたか。

岡崎: 中国に残られた日本人の中には、子どもが中国人にいじめられたりということも聞いておりますが、私自身は幸い、中国の子どもにいじめられたということは一度もないんですね。当時、子どもが多くて、どの学年もいくつもクラスがあるんですが、うちの学年の一年生の時は一クラスしかないんですね。そのクラスの中に、たまたまロシア人ひとり、北朝鮮人が一人、日本人一人と、外国人が一クラスに3人もいたんですね。

先生の指導がいいんですね。先生が盛んに言ったのは、確かに日本帝国主義は中国を侵略し、いろいろ悪いことをした。ただ本当に悪いのは一部の軍国主義者だ。一般の日本人民は我々中国人民と同じように被害者であると。従って、みんな仲よくしなければいけないと、小学校1年の時から先生は絶えず、そう言ってたんですね。クラスの人たちとも仲良くしていて、私を日本人だとか思ってない。同級生や友だちという感覚で、私はいじめられたということもありませんでした。

私はこう見えても子どもの頃、喧嘩に強かったんで、いじめられたら仕返しする、それも一つある。というのはたまたま私の同級生の兄弟がある時、喧嘩していじめられているのを通りかかって私は見たんです。それも 10 何人も見ているんですね。 5 年生とか6 年生です。当時、私は1 年生です。その私が5 年生をやっつけたんです。それでみんなはビックリしちゃって、みんなは、これは大変な男やなということがあり、それもあって、いじめられなくなったんだと思いますね。

大類: 残留孤児の話を聞くと、「小日本鬼子」と言われていじめられたということを聞いたことがありますが、そういうことはなかったんですか。

岡崎: 普通はないですね。ただ子どもですからね。喧嘩をすると「小日本」とか「日本鬼子」と言われる。そういうことを言われると力で抑えちゃうから、あまり言われなかったですね。

大類: 先生の「一部の日本軍国主義者は悪いが、普通の庶民は悪くない」という国際主義 的な教育を行う。当時はそういうすぐれた先生が多かったようですね。

岡崎: 珍しいケースなんですが、担任の先生は1年から6年まで同じ先生なんです。その 先生も中国流にいうと<模範教師>というんでしょうか、そういう賞ももらっているん ですね。優秀な先生で、やさしい女性の先生ですね。よくクラスの人たちは先生の自宅 に遊びに行ったりしたんです。私もいつもよく呼ばれるんですね。たまたま私は母がい ないものですから特別可愛がってくれました。

大類: いわゆる歴史教育はどうだったんですか。

岡崎:小学校時代は、歴史教育というのはそんなに多くなかったんです。ただ一応、第二次世界大戦の歴史、抗日戦争というのは教材にありましたね。私個人としては、あまり抵抗はなかったですね。第二次大戦は中国を侵略したのは事実だから、そこで悪いことをしたのは事実だから、それは認めて反省してこれから仲良くやっていこうと、先生も盛んにそれを言って、これから日本と中国は仲良くやっていこうと言ってましたから、抵抗はなく、それが当たり前だと思っていました。

中学も北京大学の付属中学で、北京大学の先生が中学高校の教鞭を取っていました。 太子党とよく言われますが、私たちのクラスメートはそういう人たち、軍人の幹部の子 弟が多かったですね。普通の学校は寮はないんですが、私の学校は寮に入ることになっ ていました。

■ 高校時代はサッカー少年

大類: 高校時代の生活はどうだったんでしょうか。

岡崎:私はスポーツが好きで、特にサッカーが好きで、中学や高校ではサッカー部に入っていました。遠征ということで、北京市の代表で天津まで行く予定だったんですけど、当時私は小学校に入る時から一度も中国籍を取ったことはなく、ずっと日本籍なんです。日本人の場合は、当時中国の規定があり、市外に出る時は必ず公安局に届けなければ出られないんです。許可をもらわないで出られない。子どものスポーツの試合でも公安局で手続きして許可証をもらい、天津へ行ったら「今日来ましたよ」と、また公安局へ行かないといけない。それが面倒で、人に迷惑をかけてはいけないから、私は行かなかったんですが、ずっとスポーツが好きでやっていましたから他の人とも関係が良く、また病気もしなかった。

小学校でも年 2 回、農村に応援に行かないといけないというので1週間、布団や洗面器をもって農家に泊まって一緒に食事して農作業を手伝う。もちろん小学生ですから、手伝うといってもたいしたことはできないんですが、一つはサツマイモの葉っぱがウワーと延びて結構長いんですね。その葉っぱの裏側を陽に当てないといけないので、ひっくり返さないといけない。簡単だけど面倒なんですね。そういういう作業だとか、小麦は鎌で切ると非常に危ない。子供だと怪我をする。中国の場合、乾燥していますから抜くんですね。これなら小学生でもできると。あと草取りとかですね。毎年2回、6月と11月にやるんです 当時の中国の教育は「農民に学ぶ、労働者に学ぶ」という教育です。北京市のすべての生徒はそういう体験をする。それが農業の応援にもなるということで私もそういうところに参加させてもらったというわけです。

そういうことを通じて更に中国の子供との関係がよくなるんですね。あの人は外国人ではないと、我々と同じ人だと。ただ喧嘩する時だけは「あの子は日本人だ」となるけど普通の場合は、そういうふうには思わないです。こっちも自分が、日本人で特別だと

日ごろは思っていないから友人との関係は良かったんじゃないかと思います。

■ 授業がなかった文革時代

大類:1966年に文革が始まった時、岡崎さんは高校生だった。その文革の兆候は具体的にいつ頃から感じられたのでしょうか。

岡崎:報道によりますと、中国国内でも表に出たのは 1966 年の 6 月初めですね。学校には 親が軍人の幹部で、その子弟だとか政府の要人の子どもとかが結構いまして、この人た ちはやはり親の教育を受けている関係もあるし、普通の人には入らないような情報が入 るんですね。1966 年 3 月の時点で、すでに紅衛兵というか文革の前兆のような動きが実

際あったんです。どういうふうに言ったらいいか・・・秘密組織というか地下組織でもないが(笑)、そういうものがあったんです。お互い学生同士が連絡を取り合ったり、はなったのが大学生です。一番最初の壁新聞、毛沢東もでは、北京大学の哲学部の教授である聶さんと



いう人が発表したんです。実際はその前にそういう動きがあったんです。中心になった のは高校生です。私も親しくしていたので、そういう話は聞いているんです。それで新 聞でバッーと発表しても何も驚かない。まぁこういうふうになるんじゃないかなと予想 もついていました。文革が始まると最初は良かったんですが、途中ですべて学校の授業 が中断して授業ができない。どの学校も小学校中学校も高校、大学全部が授業がストッ プ。まぁ当時、一番可哀そうだったなと思ったのは小学生ですね。高校生とか大学生の 場合は、1年や2年、学校に行かなくても一定の知識をもっているわけですから、自分 でも勉強はできるんですが、小学生は基本的な数学とか国語とか基礎がまったくないわ けですから、学校がなければ遊ぶだけなんで、その人たちはちょっと可哀そうだったな ぁというふうに思いますけど、我々はちょうど授業もないし、運動というか、そういう ものを毎日学校には出ているんだけど、先生は授業をやれないんです。批判されている から。だから毎日、毛沢東の本がありますね。毛選集が当時、全部で4巻あって、その 後に5巻が出たんですが、その勉強と、更に当時テレビなどで皆さんも見られたと思う けど、紅衛兵が持っている毛沢東語録がありますね。それを毎日読むんです。私も半分 以上暗記して、今は全然ダメですが、必ず会議の前に、今日の会議の内容に合わせて毛 沢東語録の何頁の何番かを読み上げるんですね。

■ 紅衛兵と壁新聞

あと、何をやるかといえば、学生たちは壁新聞をクラスで書いて市内などに張り出す。 内容は学生ですから教育制度や先生に対する批判とか、あと一部は、政府の腐敗した高 官などに対する批判です。私は自分で書くわけではないですが、仲間が書いた内容を見 せてもらっていたので、その辺の状況はよく掴んでいます。

他の人と体験が違うというのは、普通は外国人だと追い返されちゃうんです。文革前は、外国人だからというので「来るな」と言われるんです。

文革のちょっと前でも学校に中国のいろんな人が講演に来るんですね。ほとんどそういう時は、私は「今日午後来なくていい」と言われてはずされるんです。「講演に出るな」と言われるので、半日休みということもありました。

しかし文革の時はみんな仲間だから、学校の命令もないし「あんたもいらっしゃい」 と言われました。一応、組織には参加していませんが、みんなと同じように「わぁわぁ ーとみんなと一緒にやってきた」という体験はあります。

大類:1966年3月ぐらいに秘密裡に組織のようなものがあったという話ですが、具体的にはどういう内容なんでしょうか。

岡崎: 文革がスタートしたということは毛沢東が、当時 1960 年代初めごろ中国が自然災害を受けて非常に困難な時期があり、またソ連との関係も悪くなって、中国はソ連に対して修正主義といって批判していた。喧嘩をしていたんですね そういう中でロシアは堕落したと、もともとの共産主義を修正して堕落したと批判していたんです。中国も同じように腐敗して堕落して同じような道を行く、社会主義でなくなるんではないかと心配して、毛沢東は文化大革命を提起したんですね。その動きに関する内部の情報が入ってきて学生たちが動きだしたと思います。

大類: その内部の情報というのは、今の状況だと中国の方針もソ連のように堕落する可能性があるので、それに対する闘いが始まるのではないかということですか。

岡崎: 中国が修正主義にならないために純粋のマルクス・レーニン主義を守るためにやらないといけないという、今でいうと権力闘争ですね。変な方向に行っては困ると・・・それは自分の政権を守らないといけないということで。というのは新中国になっていくつもの運動がありますね。三反運動だとか反右派の運動とかがあって、そうしてうまくいったら、自然災害とかソ連との関係で悪くなり、国際的に中国が孤立するような時期になって、このままでは中国は大変危ないなと総合的に判断して文化革命運動を提起したと思います。

■ 激しかった紅衛兵同士の争い

大類:67年68年あたりはかなり激しくて紅衛兵が知識人の家に押しかけていくというような現場をご覧になったとか、周りの友人の家がそうなったとか、ありますか。

岡崎:私が通った学校の学生の三分の一の出身は幹部の子弟でしたが、あとの一部は文革で打倒される対象の人たちだった。当時は階級が決められていた。知識層、労働者、農

民、地主だと階級があるんですね。出身がいいのは労働者、農民、幹部とか軍人の子弟とかで、悪い出身は地主とか経営者、中国では資本家ですね、悪い出身の人は叩かれているんですね そういう親を持つ同級生も中にいるわけです。別に本人が悪いわけじゃないけど、そういう出身だけで批判され叩かれるわけです。それは目の前に見ていますし知っています。

大類:外から見るかぎり紅衛兵は毛沢東語録を掲げて闘う、日本では一部、それこそ「魂が震える革命」と言われ熱烈に支持した人たちもいたけど、北京の中国の友人たちはどういう考えだったんでしょうか。

岡崎: 文革の最初はみな若い人ですから気持ちは純粋なんですね。もう少し中国を良くしようとか、毛沢東を守らなければいけないとか。しかしそのうち、長くやると徐々にそれぞれの考え方が分かれてくるんですね 紅衛兵同士の喧嘩というか戦争が出てきたんです。

例えば、一つ例を挙げると北京大学の中にある紅衛兵組織が、新しい北大、「新北大」 (シンベーダー)という組織です。また清華大学が隣にあり、「新清華」(シンチンファ) という紅衛兵組織があり、この二つは考え方が違うというので対立しているんです。

最初は口喧嘩でしたが、そのうち武器といっても中国では法律で武器を持つことは禁止されていて銃剣は持つことはできません。それでどうなるかというと7月の夏のくそ熱い時に、ヘルメット、今みたいに立派なものはなくて、みなさんも中国で見たことがあるかもしれないけど、工事現場で柳とか竹で編んだヘルメットがありますね。そういうものをかぶって、怪我しちゃいけないというので、綿入れのコートを着てお互いに石を投げたり殴ったりして襲撃したり、寮と寮の間に石を投げたり、最初はそんな感じがだんだんエスカレートしたことがありました。地方では行き過ぎがあり、銃を使ったところもあるし、いろいろある。最初はそうでもなかったんです。いずれにしろ、しっかりした理論体系があり、それに基づいて運動すればそんなことはならないんですが、若い人たちは直感的にこれが正しい、これが間違いといってスタートしたんです。私は、北京の高校や大学の全体の紅衛兵のリーダーは全部知っているんです。たぶん日本人で知っているなんていうのは私ぐらいかもしれない(笑)

いろんな状況があり、徐々に方向が転換され、文革が変な方向に行った。一番の問題はやはり学校で授業がなかったということですね。それと工場が一部ストップして生産をしない。運動ばっかりやっている。生産にも大きく影響するし、授業がないというので幹部の養成ができなくなり、いわゆる開放政策を取った時しばらくして中年の幹部が不足したんです。上の幹部はだんだん年とって定年になるし、下の幹部は若すぎ、真ん中の幹部は全然なっていない。そういう時代がしばらく続いたんです。

■ 新しい体験を求めて27工場へ

岡崎: 私個人のことで言いますと、授業はないし、最初は友人のみなさんと一緒にこうい う運動に参加したんですが、運動のネタもなくなり、また学校の授業もなく、だんだん と面白くなくなった。もう一つは、私自身いずれ子どもの時から、日本人である以上はいずれ日本に帰らなければいけないという考えをもっていたんです。日本に帰って何をするか具体的な目標が特にないんですが、少なくとも日中友好活動はやらなければいけない。中国で教育を受けて中国の人と仲良くしているから、この活動はやりたいと。それ以上のものは持っていませんので、いろいろ中国のことをもっと勉強して、もっと知らないといけないと思いました。

本を読むのはいくらでもできますけど、まず、もっと体験しないといけないという意味で、中国の一般労働者の生活を体験しないといけない。ただ普通の工場で体験するだけじゃなくて、その工場自身がいわゆる、中国でまぁまぁいい工場であると同時に、革命的で歴史ある工場、そうすると革命史と労働者の生活等の体験ができるということで、北京の27機関車工場というのを聞いたことがあるかもしれないですが、そこで働きました。27というのは2月7日に鄭州で、当時、鉄道で初めて組合を作った、一番最初に中国国内で労働者のストライキをやった伝統ある組織です。

当時国民党に弾圧されたんですが、伝統的な歴史を持っている工場で歴史の勉強と労働者の生活体験ということを半年間やりました。二交代で普通の労働者と一緒に、昼間1週間、夜勤1週間、働いてきましたが賃金をもらいません。ボランティアではないけど勉強に行ったので宿舎はただです。サッカーが好きだったので、よく労働者のみなさんとサッカーで遊び、銭湯に一緒に行ったりしました。あの時はいっぱい勉強しましたね。

タバコを吸いたいことはなかったんだけど、夜勤があるから、眠気を取るために若い 人は吸いなさいと言われ、タバコをもらいました。いつももらうと申し訳ないと思い、 自分で買うようになり吸うようになったんですね。それだけ関係が深かった。

更に農業を学ぶために、農家で半年間、江西省の井岡山という名前を聞いたことがあるでしょうか。中国の革命史で重要な1920年代に、毛沢東が中心で革命根拠地、中央政府を作った由緒ある井岡山で働きました。

たまたまお願いしたら、その農家は、当時毛沢東と一緒に民兵組織の隊長をやった人の家庭で、一緒に半年間、生活したり農作業をお手伝いしたんです。

何が困ったか。一番最初に困ったのは食べ物です。北京はまぁ普通の料理ですが、南の方に行くと食べ物はみんな辛いんです。料理は全部、赤い。我々には特別に唐辛子を減らしているというんですが、とてもじゃないが食べられないんです。でも若いし、3日で大丈夫、すぐ慣れるんです。3日目から「おいしい、おいしい」と食べるようになったんです。

皆さんは「憶苦思甜」(イークースーティエン)という言葉を聞いたことがあるでしょうか。その意味は、「昔の苦しみを思い出して、いまの幸せを忘れないように」ということですが、そういう運動がありました。井岡山は土地は広いんですが、人が少なく、毎年収穫時期になると、解放軍や若い人が応援に来るわけです。

たまたま私が行った初日に解放軍が応援に来られました。その時の昼食は、おにぎり

のようなものを二個ずつ配られたんです。そのおにぎりは糠(ぬか)ですね。米は数えられるしか入っていないんです。これは噛んでも噛んでも、噛めないんです。1920年代、紅軍は当時苦しくて、そういうものを食べていたんです。山奥ですから、塩が高い、金より高いと言われたんです。おかずというのはスープですが塩がほとんど入っていない。スープといっても野菜が入っていればいいけど、そこら辺の草を入れたスープで流し込む。私は1個食べるのに苦労したんです。でも中国の解放軍の若い人はたいしたものです。2個ペロッと食べちゃう。そして午後は働きに行くんです。

私は、午後は山に登って竹を伐採して上からかついで運ぶんですが、山は 10mぐらい、少なくとも7~8 m はある。乾燥しているならいいんですが、湿気があって竹が重いんです。機械がないから収穫したコメを大きいたらいに入れて叩くんです。なかなかこれはきついんです。その後は、南ですから籠は全部、竹で創り、天秤棒で片道1キロを運ぶんです。土地は広くて労働力は少ないから、電気はなく、夜はたき火の中で9時まで働くんです。私も少しやったことはありますが、毎日やったことはないから肩が痛くて大変でしたが、若いんですぐ慣れました。

■ 貴重な体験だった農民との生活

岡崎: そこで収穫があったのは、一つは、農民の生活体験ができたと言う事と、もう一つは農家の皆さんと非常に仲良くなりました。皆さんは各家庭で豚を飼っていて、豚を殺す時は一斉にやるのではなく、一軒ずつやるんです。自分のところで豚を屠殺して村人を呼んでご馳走する。残ったものを外に売るんです。私は幸せだったと思うのはすべての家庭から呼ばれて、ご馳走になって美味しい豚肉を食べたということです。それだけ仲良くなったんです。

当時は今流のサービスとかという考えでは全くない。みんな困っているから、してあげたいという気持ちだけです。

子供たちは、学校は授業がないので可愛そうで、雪が降ると仕事がないので、毎日ではないけど、私の借りた農家の部屋に子どもたちに来てもらって、数学と国語を教えたりしました。また北京から行くとき、農村には床屋はないだろうというので、バリカンを持って来ていて、男の子たちに髪を切っていたら、今度は婦人たちが、ぜひ切ってくれというんです。バリカンは使ったことはあるけど、はさみで切ったことはない。「いやぁ、とにかく短くしてくれ」と言うので、しょうがないから一人をやると、次から次へとみんなが切ってくれという。夜も農家へ行ってみんなと話をして仲良くなり、そうして2月に北京に戻る時、村中の人が総出でずっと見送ってくれました。あの時は本当に感動しました。たいしたこともしてないのに、よくやってくれたなと思いました。その体験が一番、印象に残っています。

<会場からの質問を受ける>

質問: 文革は10年間続きました。その時代、批林批孔と言われました。林彪への批判は わかるのですが、孔子に対してはどうだったのでしょうか。孔子廟は残っていますよね

岡崎: 批林批孔という運動があったんですね。林彪事件はみなさんもご存じの通りです。 孔子孟子は中国の長い歴史にとって手本なんですね。みんなそれを学んで、今日の中国 の道徳とか文化があるわけですね。それが一時行き過ぎて、批判が出てきた。孔子 へ の批判をうまく利用して林彪などの幹部に対する批判なんですね。一部若干、お寺など が破壊されたりしましたけど。孔子は、今でも曲阜に行けばちゃんと立派な墓とか建物 がちゃんと残っています。周恩来総理がえらかったのは、それを守ってくれたんです。

質問:何故そういう質問するかというと、私の名前の成孔の孔は孔子の孔で(笑)当時、中国に行けなかったんです。そういうことってあったんでしょうか。

岡崎: 孔という字がついていたから行けなかったというのはないと思うんです。ただ私は韓国と台湾は行けなかったんです。仕事でどうしても行かなきゃいけないのに行けなかった。私は北朝鮮へ行ったことがあるんです。北朝鮮へ行ったら韓国へ入れないんです。今はもちろん関係ないですよ。中国へしょっちゅう行っている人は台湾へは行けない。全部、リストに入っているんです。

質問:四人組についてお聞きしたい。実体験としていかがでしたか。

岡崎:四人組で象徴される一番最初のことは文化ですね。江青は日本でいえば文化大臣で、しかし実際はそれより上なんですが、文革が始まる前に、現代京劇、現代バレエという文化から中国を変えていかないといけないと考えたんですね。従来のバレエは、どの国もそうなんですが、ほとんどヨーロッパのものです。中国のバレエをもっと現代的に直すというか変えていくということを江青が最初に提唱した運動から入っていったんです。彼女は文革小組という4人か5人で組を作り、指導部ということでリーダーだったんです。

姚文元とか張春橋というこの二人は理論家というか文章を書く。雑誌とか「人民日報」や「紅旗」に自分たちの主義主張を書いて煽るんですね。当時の毛沢東政権を倒して自分たちの政権を作ろうというのが、そもそものスタートの原因なんですね。

質問:文革というと下放ですね。岡崎さんのお父さんは下放の対象にはされなかったんですか?

岡崎:下放というのは大人が対象ではない。「労働者や農民から学ぶ」という意味で知識 青年が対象でした。私は、本当は別に工場とか農村に行く必要はまったくないんです。 日本人だから関係はないんです。私が農村に行くのは手続きなど大変だったんです。 これは特別なんです。これは今の日本で言うと内閣府の認可がないと行けないんです。 当時は国務院の了解を得て、まず専家局、それから国務院、地方の政府に連絡がいっ てるんです。「この男が行くから頼むよ」と連絡がいってるんです。私は強制的に行か されたわけでなく、自分で勉強をしたいから、せっかくの機会だからと行ったんです。 だから文革の真っ最中で治安も非常に悪いんです。北京から南昌まではいいんです。 南昌から井岡山は、山道をずっと車で走っていくんです。なんと解放軍が私みたいな 一般人を警護するためについてきたんですよ。それだけ危ないということです。そして農村の家庭に入った時、まず今も銃を持つ民兵組織がある。夜はガードして守っているんです、危ないから。そういう意味でいい体験をさせてもらったなと思います。

質問:おドラマの『大地の子』のように、日本人の身分を隠して生きたという人もあったようですが・・・

岡崎:結講そういう人はいるんですが、私が北京にいるということと、親が大学で教鞭を取って、政府の方から特別に認可されたという待遇が全然違うものですから。

映画でやっていることは何も間違いじゃない。私もそういう家庭の人も知っている んです。日本人と言ったら大変なんですよ。それもよく知っています。逆に私などは 日本人だからと通った部分もあるんです。比較にはちょっとならないと思います。

それから下放というのは、同級生のほとんどの人は農村に下放され、文革が一段落して戻ってきて大学に入り、中に教授になったり学校の党書記になったり偉い人になったりした人もいます、その人たちも下放されたんですが、私の下放とは意味合いがちょっと違うと思います。

質問:歴史の話になるんですが、1972年に田中角栄さんによって中国と日本が国交回復しましたが、岡﨑先生が言われたように中国には、日本が侵略のことを謝ることで仲良くしようという寛大な気持ちが中国人にはある、と言われた。しかし今、日本と中国との外交がうまくいってないのは何故なのでしょうか。

岡﨑:日本と中国が国交正常化したのは 1972 年の 9 月ですね。その前に、なぜできなか ったかというのは、歴史問題も一つですが台湾問題がある。日本は台湾と国交があっ た。中国は中華人民共和国が唯一の政府である、ということで中華民国を認めないわ けですね。一方、日本は台湾と国交があるんです。この国交を断絶しない限り、中国 政府とは国交は回復できない。当時、日本の歴代総理は中国敵視政策をずっととって きた。そういう中で中国は民間交流を粘り強くやってきた。経済交流などもやってき て、少しづつ運動も広がり気運が上がってきて、田中角栄さんは中国と仲良くしなき やいけないという気持ちになったんです。今までの歴代総理はそこまで決意できない。 自民党の中にはずっと反対だったんです。それを振り切ってまでやろうとした。それ だけ田中先生は力があったんです。要するに政権に自信があったんです。その後、田 中角栄さんが失脚したのは事実かもしれないが、明らかにアメリカ、CIA の陰謀です よ。アメリカの言うことを歴代総理はみんな聞いていた。彼は聞かない。中国やロシ アなどについて、田中先生は独自の考えがあってアメリカと合わない。文芸春秋のあ の記者はうまく利用されて、本人はロッキード事件を大スクープで暴いたと喜んでい ますが、どこの国でもいろんな国の政権が転覆していますが、ほとんどアメリカが、 CIA が後ろで操ってやっています。しかし今は、力関係が変わり、アメリカのコント ロールができないから、中近東などでの争いがなかなか終わらない。表から見ると、 よくわからない点もあるでしょうが、よく見るとそういうことだと思います。

質問:習近平政権は今、腐敗退治をしていますが、岡崎さんはどのように見ていますか。

岡崎: 私が中国にいた若い時は、中国の国家指導者の順番が素人の私でもわかるように決まっていた。今は、開放政策を実行して 30 数年になりますね。誰が次の指導者になるかということは、一番のトップはわかるかもしれないが、下の方についてはわからない。今、いろんな制度で、若くて頭が良くて試験で合格すればどんどん上がっていくようなシステムになっていくと、能力はあると思いますが、人間は苦労をあまりせずに周りからチヤホヤされると汚職するようになりやすい。また中国自身は、長い封建社会の歴史の中で、手ぶらで人にお願いはできない、相手にされない。この人に会いたいと言ってもお土産が一つもないと、何を言っているんだ、と全然相手にされない。でも何かを渡したとしても、渡した方ももらう方も賄賂という意識はないんです。今問題になっているのは賄賂の規模が大き過ぎるんです。例えば、日本でいう 100 万ぐらいをもらっていればよかったんでしょうが、1000 万とか 1 億とか 10 億とか、金額がどんどんエスカレートしている、それが一つ。

それから中国では、省庁は力を持っていて権力を握ると、力を持っている人がやりたいことをやって問題が多くなる。最近で言うと、名古屋市と南京市は友好都市なんですが、名古屋市長は河村さんで、このひとは今、南京で嫌われて喧嘩をやっている最中ですが、その南京で市長さんがこの1年内で逮捕されて、党書記も問題があり、トップが全部変わると仕事がやりにくくなる。何故彼らは逮捕されたか。彼らは、市長あるいは党書記の時代に功績を残さないといけない、というのが強すぎて、無理していろんなものを造ると、それがまた違法というか問題を生じる。これはいずれ解決しなければいけないんですが、それをまたあんまりやり過ぎるとまた反発も強くなるから、徐々に修復の方向に持っていかないと、いつまでも広げていくと中国のためにも良くないと思います。

予定の時間も来ました。ご清聴いただき、みなさんどうもありがとうございました。 (写真撮影:森一彦)



会場では「嗚呼 満蒙開拓団」の記録映画作家 羽田澄子さんや 大勢の会員が熱心に聴き入っていた

天を恨み、地を呪いました 松田5ゑさんの半生・9 4春秋 その2

奥村正雄

(3)

1945年8月、松田ちゑさんたち三江省依蘭県北靠山屯村山開拓団の一行は命からがら方正の近くにたどり着いたが、収容されたのは方正郊外の伊漢通開拓団跡だった。ここはもちろん定住地ではなく、ハルピンを経て祖国日本へ帰るための通過点のはずだった。だがここで新たな悲劇が避難民を待っていた。松田さんの『天を恨み 地を呪いました』は次のようにレポートしている。



方正政府を表敬訪問、息子・崔鳳義さんと (2004年6月)

■月光の下で娘は…

〈収容所生活も2ヶ月あまり過ぎ、11月中旬ごろになると、寒さが身を刺すようにきびしくなってきました。ある夜のことでした。月は眞ん丸く煌々と冴えていました。収容所は静まりかえり、難民が眠りに入った頃です。私もわが子を固く抱きしめて、毛布1枚、ムシロを頭からかぶって、いつしか眠りに入り、懐かしい故郷に帰り、母と兄妹に迎えられ、美味しいご馳走を食べようと、箸を取った途端、戸口の方でどやどやと騒がしくなり、パンパンと鉄砲を撃つ音が聞こえたのです。驚いて、わが子をしっかり胸に抱き、死なば子供と一緒にと覚悟を決めました。

戸口の方で眠っていた人達が、何も言わずにドヤドヤと奥の方に逃げてきて、一家の人は、みんな死なばもろともと無言のまま、ひとかたまりになって殺されるのを待っていま

した。あまりの恐ろしさに泣く子さえいません。

外は、月の光で明るかったようでしたが、家の中は暗闇で何も見えず、かたまった人の無言が、十分、二十分ぐらい過ぎたころでした。外から一人の娘が泣きながら、丸裸にされて入って来ました。娘は、今の出来事がどんなに恐ろしかったのか、ブルブルと震えて、泣くにも泣けず、震えがとまりませんでした。

「ロスケは帰ったの?」

と聞きましたが、震えるあまり口もきけず、ただ頭を下げるだけでした。私はあまりにも 残酷なやり方に、怒りと憎しみで胸が裂けるほど口惜しくてなりませんでした。丸裸の娘 に何か着せなければと思い、拾ってきた日本軍の外套を与えました。私を寒さから守って くれる1枚の外套でしたが、丸裸の娘を見ると与えずにはいられませんでした。娘は有難 うも言えず、ただ震えながら、頭を下げるばかりでした。

丸裸の娘に何か着せなければと思い、拾ってきた日本軍の外套を与えました。私を寒さから守ってくれる外套でしたが、丸裸の娘を見ると与えずにはいられませんでした。娘は 有難うも言えず、ただ震えながら、頭を下げるばかりでした。

ロスケは満足して帰ったらしく何の音もしません。そのあと家の中のみんなは眠ること もできず、座りなおして、一言二言、内緒話のように静かに話しながら、夜明けを待ちま した>

夜が明けてから娘の母親から経過を聞いた。暗闇の室内へ2本のローソクを持って入ってきたソ連兵3人は、銃で威嚇しながら入り口近くにいた姉妹と母親、その妹を連れ出して乱暴し、あげくに良い服を着ていた娘の身ぐるみ剥いで帰ったのだった。飢え、寒さ、病気の上にこんな恐怖も日夜、避難民を脅かし続けたのである>

■凍土で死体、埋められず

こうした恐怖を開拓民に与え続けたソ連兵たちは、やがて移動して行ったが、松田さん たち避難民に襲いかかったたのが飢えと寒さと疫病だった。

<昭和20年の12月、収容所の難民は食べ物がなく、着るものも薄く、外に出れば身を刺すほどの寒さでした。難民は栄養不良から酷寒に耐えられず、病人が続出、死亡者が日 一日と多くなってきました。記憶では11月頃に1日15人くらい、毎日のように死にま した。12月になってからは、1日26人もの人が亡くなったことを覚えています。

9,10月頃は、まだ地面が凍らないので土を掘って埋めましたが、11月、12月になると、土がカンカンに凍って掘ることもできなくなりました。この部落の開拓団には、寒い冬の食べる野菜を凍らぬようにして置く菜場掘穴がありました。その穴は幅5メートル、長さ10メートル余もありました。その穴に死体を積み重ねました。その穴も12月にはいっぱいになってしまいました>

(4)

■ 生きてさえいれば…

この頃から国道を夜となく昼となくトラックの音が絶えなくなった。自国へ引き上げてゆくソ連軍のトラックだった。そしてソ連軍が引き揚げると、代わって中国共産党の八路軍が方正県に入ってきた。長い間、中国国内で日本軍と戦う一方、蒋介石が率いる国民党軍とつばぜり合いを続けてきた八路軍は、日本の中国侵略戦争が終わったとはいえ、まだ国民党との間で激烈な内戦を続けていた段階。内政面でもまだ未成熟だったが、厳冬期に向かってバタバタと死んでゆく日本の開拓民にどう対応したかについて、松田さんはその著書『天を恨み 地を呪いました』の中で次のように書いている。

(まず、日本婦人または子供を、中国人がもらって助けてやっても良いと政府から指示があったのです。その後、婦人をもらう人、子供を引き取る人が、毎日のように収容所に訪ねてくるようになりました。。ここにいれば、最後には皆、死ななければならない。死ぬよりは、中国人の家へ行って命だけ助けてもらえればよい。生きてさえいれば、きっといつかは恋しい故郷に帰れる時もあるだろうと、お互いに慰め合い、難民は寒さと飢えに耐えかねて、中国人の家に貰われて行く人が多くなっていきました>

■最愛の娘との別れ

伊漢通の収容所では、それまで元気にまわりの難民の世話をしていた松田ちゑさんもダウンしてしまう。高熱で食欲がなく、のどを通るのは水ばかり。発疹チブスは次第に重くなり、これが最愛の一人娘(当時6歳)に伝染してしまう。1946年1月1日、この親子を看病してくれていた開拓団(三江省依蘭県第8次北靠山屯村山開拓団)の責任者・結

城さんが、せめて元旦だけでもこの重病の母娘に正月を祝わせてやりたいと、丸い餅を二つ買ってきてくれた。痩せ細った手に餅を持たされた娘は力なく笑ったが、その翌日、息を引き取った。

<私はどんなに厳しい山道でもおんぶし、子供だけは私の命と思い、共に日本に着くまでは子供と一緒に帰りたいと思っていました。そのかいもなく、子供は私を残して、先に旅立ってしまいました。>

最愛の娘をわが手で葬ってやることもできず、骨と皮ばかりになった娘は結城さんの手に抱かれて収容所を出て行った。これを横たわったまま見送った松田ちゑさんの病気は、 その後、いよいよ重くなるばかりだった。ここで松田さんは重大決心をする。

<元気なうちは「ソ連軍や中国人には死んでも行かない」と口癖のように言っていた私でした。しかし、死の道に1歩足を踏み込むと、人間の根性でしょうか、どう考えても死にたくない。今まで苦労のしっぱなしです。生きていればきっと光明が待っているかもしれないと、結城さんに「今まで世話になり放題で別れることは申し訳ありませんが、死にたくありません。中国人の家に行けば生きられると思います。元気になったら、きっと皆様に会いに行きます。結城さん、すみませんが、中国人が来たら私を世話してください。お願いします」と頼みました>

あの気丈な松田さんが、最愛の娘を失い、自分ももうこれ以上生きられないと思った時にどう決心したのか、告白のこのくだりは、生きることの土壇場に追い詰められた時の、 人間の気持ちをリアルに語っている。そしてこれは異国で生きられなくなった人間の選択 肢として、だれも首肯するだろう。

松田さんが第2の人生に飛び込んだそのあと、無念の死を遂げた同胞の遺体は、季節が冬から春へ移り始めた頃、新たな難題を突き付けた。それまで寒さで凍っていた同胞の遺体が、気温の上昇とともに解け始めたのだ。まだ元気が残っていた開拓団の一部の男性たちと地元の中国人たちが、この悪臭が漂い始めた遺体約4500体余りを荷車に積んで、近くの炮台山の山麓に運んだ。そして遺体の上に木材を井桁に組み、ガソリンをかけて焼いた。その状況を、中国側の資料『夢砕満州一日本開拓団覆滅前後』(政協黒竜江省委員会文史資料委員会弁公室発行、1991年)は、次のように記述している。

< 1946年方正県人民政府が成立。県人民政府は日本の開拓民の悲惨な死の情景を目の 当たりに見て、ただちに屍体の収容を決定した。・

県人民政府は、方正鎮、徳善、伊漢通などから人と車を動員し、雪の中から開拓民の屍体を探しては掘り起こしながら車に積んだ。当時、屍体を扱った人の話によれば、一体一体、車に積み重ね、どの車も人の背丈ほどの高さに積み上げた。そして車から崩れ落ちないように、みんな縄で結わえた。このようにして各地から運んだ遺体を、炮台山の東の楊二玄溝に集めた。およそ4500体あまりで、まるまる3つの山に積み上げられた。それからガソリンをかけ、3日3晩かけて焼いた>

この焼かれた同胞の白骨と、後年、松田ちゑさんが偶然、巡り合うことになる。

澤地久枝さんの阿智村での講演

満蒙開拓平和記念館 寺沢秀文

1. 澤地さんと満蒙開拓

去る11月3日、ノンフィクション作家の澤地久枝さんが、満蒙開拓平和記念館並びに 飯田日中友好協会の招きにより記念館のある長野県阿智村に来られ、『私の満蒙開拓団体 験』という演題で講演して頂きました。

今年85歳になられ、以前に心臓手術をされペースメーカーを入れられていること等もあって、最近は遠隔地での講演等は原則として受けていないという澤地さんですが、「満蒙開拓のことならば」と快諾して頂き講演に来て頂くことが出来ました。と言うのも、澤地さんはお父さんが満鉄職員であったことから、14歳で旧満州の吉林市にて終戦を迎えています。そして、終戦直前の昭和20年6月からの1ヶ月間、当時通っていた吉林高等女学校の学徒動員により、吉林省にあった「水曲柳開拓団」に住み込みで勤労奉仕に行ったという体験をされています。私事ながら、ここは当方の両親が住んでいた村でもありました。そのようなご縁から、開館直後の満蒙開拓平和記念館にも足を運ばれて以降、ご厚誼を頂く中で、今回の講演が実現した次第でした。当日は85歳とはとても思えないお元気な語り口で、満蒙開拓のこと、旧満州のこと、そして今、澤地さんが提唱されている現安倍政権に対しての「アベ政治を許さない」という活動等についても触れられ、約500人の満員の聴衆を前に約1時間半にわたっての熱弁でした。

2. 澤地さんの講演から(以下は要旨です)

14歳の時に旧満州で終戦を迎えた。当時の自分は軍国少女で「神風は吹かなかった」 と思った。しかし、満州という国は「五族協和」と言いながら、日本人と現地の中国人と の間には配給品などにも差別があり、決して平等ではなく民族差別があるということは実 感として感じてはいた。終戦の少し前の6月から約1ヶ月間、「水曲柳」という開拓団に 勤労奉仕として住み込みで働きに行った。東京生まれで、満州に来てからも満鉄の社宅で 暮らしていた自分にとって、泥のレンガを積み重ねただけの窓も無い家での暮らし、電気 も水道も無いそこでの生活は驚くべき体験であった。村にとって一番必要な男手は「根こ そぎ動員」により軍隊に取られ、若い男性の姿は全く無く、その徴兵された男性たちは武 器も与えられず塹壕掘りをやらされていたと言う。そして、その労働力不足の補充のため に私たちのような女学生が動員されていたわけで、当時の日本の政治は本当にお粗末であ ったと思う。その開拓の村から吉林駅近くにあった我が家に戻り、ソ連軍侵攻の8月9日 の深夜、落とされたソ連軍の照明弾の音とその明るさに驚いた。その頃、戦場病院と化し ていた女学校で看護婦見習いをしていたが、終戦直後に吉林神社で解隊式をした。その時、 市内で中国の少年から中華民国の旗を突きつけられ「日本負けた」と言われた。そのこと を指導してくれていた衛生兵長に言うと「そんなことはあるはずない」と「戦陣訓」を吟 じていた。戦前の人たちは「生きて虜囚の辱めを受けず」と教育され、敵の捕虜になった 軍人は戦死と家族に知らされた。戦後、取材したある夫婦の夫は米軍の捕虜となり、実家には戦死したと伝えられ、その妻はやむなく家を継いだ弟の妻となっていた。しかし、戦死したはずの夫が生きて帰ってきて、多くの人たちが困惑する結果となった。戦争のために多くの人たちが悲しい思いをした。捕虜になっても殺されないということを、日本の軍部のトップの人たちは都合の悪いこととして国民には教えなかった。

かつて日本の国の先に立った人たちは満蒙開拓も含めて国民を窮地に追いやったのに、 そのことの責任を誰も取らない。加藤完治のような人たちが満蒙開拓の理想を謳い、学校 の先生たちも「満州に行け」と言った。子沢山で貧しい農家の次男坊以下に「20町歩の 地主になれる」と誘って送り込んだ。しかし、その農地や家の多くは中国人たちから半ば 強引に取り上げたものであり、理想の国などではなかった。夢を抱いて渡っていった人た ちに、現地にあるのは「泥の家」であり、「電気も水道も無い場所」という現実を話して いたらあんなに多くの人たちは行かなかったはず。都合のいいことを言って満州へと送り 込んだ人たちがいたのに、その人たちの責任を開拓団の人たちも誰も口にしようとはしな い。貧しい人たちを、そして青少年義勇軍のような幼い少年達を戦場に送り込むような国 はおかしい。あの時の日本という国は国民を助けようとしなかった。ソ連参戦の時にも前 線に取り残された開拓団員たちを救おうともしなかった。まだ動いていた満鉄に最初に乗 って南へと逃げていったのは高級軍人、高級官僚の家族達だった。終戦後、北の方から逃 れてきた日本人の避難民たちが吉林市内の収容所にも溢れていた。そこで涙ながらに話さ れていたという話しを父から伝え聞いたが、「やむなく我が子を絞め殺してきた」、「老 いた母を置き去りにしてきた」というひどい話しだった。その話しを聞いて、自分がお世 話になった水曲柳開拓団の人たちはきっと生きてはいないだろうと思った。軍国主義の申 し子であった自分だったが、開拓団での1ヶ月の体験は私に戦争や平和、国という存在に ついて考える機会を与えてくれた体験だった。開拓団での体験は私にとっても大きな転換 となり、そしてその後の開拓団の運命を思い、戦後も中国へ行く度に水曲柳のことを誰か 知らないかと聞いたが誰も知らなかった。2年前の満蒙開拓平和記念館の開館を知らせる 新聞紙上で寺沢さんのことを知り、そこに「水曲柳」の名前があることに驚いた。 2 年前 に新宿から高速バスに乗って、初めて満蒙開拓平和記念館に来た時には本当に遠い所で驚 いた。

そんな開拓団体験等もあって、戦後は出版界に入って戦争のことなどについて書くようになったが、ある時、反満抗日活動の指導者として中国国内でも有名な楊靖宇という人物について調べるために旧満州に調査に来たことがあった。楊靖宇は35歳になる直前に日本軍の掃討軍により殺されたが、抗日活動の英雄として広く知られ、亡くなった場所は彼に因み靖宇県と言い、そこの靖宇鎮には彼の記念館も建てられている。中国各地の戦争歴史館などに行っても必ず彼の名前や遺品などがある。その楊靖宇のことを調べるために現地の関係者等に「楊靖宇に関する写真などは無いか」と尋ねたら、「日本人が殺したんだから日本で探せばいいだろう」と冷たい声で言われた。実際に日本に帰ってきてからテレビでその話をしたら、いろいろな写真が集まってきた。その中には日本軍が行った残虐な行為を写したひどい写真などもあり、本当に日本は中国で沢山のひどいことをしたのだと

改めて思った。この楊靖宇について調べていく中で、ある時、革命の英雄だったという100歳ぐらいの元将軍のお話を聞いている時、しきりと「方正」という言葉が出てきた。 実はかつて「方正」には反満抗日活動の拠点があり、抗日戦を扱った歴史書にも良く出てくる地名であると言うことをこの時に知った。「方正」は今は「日本人公墓」のある場所としても知られているが、しかし、少し年輩の中国人たちにとっては「方正」は抗日活動の聖地でもあったことも忘れてはならない。

満蒙開拓平和記念館が出来たことなどもきっかけとなってと思うが、ここ数年、満蒙開 拓に関する資料や体験談などを送ってきてくれる人たちが増えた。それらを目にしても、 本当に日本という国は自分の国民を捨てたのだと改めて思う。ああいったことをやった日 本という国は今になってまた同じ道を歩もうとしている。今の安倍政権はやりたい放題で 本当に危ない。このままだと弱い立場の国民がまた犠牲になっていく。国のやっているお かしなことには国民も怒らなくてはならない。今の日本は末期資本主義の国。儲ける人た ちもいる一方で多くの国民は生活を切り詰めている。それなのに軍事費を増やして高額な オスプレイをアメリカから買わされている。沖縄のことをあれだけ声を上げてもそれがど うにもならない。今、「本土の沖縄化」が進められようとしている。沖縄はそのままにし ておいて、本土の各地に米軍の基地を増やそうとしている。それを進めている今の安倍政 権は本当にひどい。何とかしなきゃならないと思い、鳥越俊太郎さんと話しをし、同じ日 の同じ時間に全国各地で同じプラカードを持って立って反対の声を上げようということに なった。その言葉を私に書いてと言われ、「アベ政権を許さない」と言葉を決め、その字 を私の尊敬する96歳の俳人の金子兜太さんに力強い字で書いてもらった。毎月3日の午 後1時に全国のどこかでこのプラカードを持って立つ活動をこれからも続けていく。今日 は私も途中で掲げ、この会場の入口でも多くの方が掲げていてくれて嬉しかった。

満蒙開拓平和記念館のことはいろいろな人たちから「良い場所を作ってくれた」という声を聞く。悲惨な戦争を二度としないためにも私たちも活動しなくてはならない。避けられない戦争は無い。しかし、今の政治や経済は危うい。今のような状態が続けばまた日本は必ず破綻する。その時に私たちが、かつてのように「棄民」として国から切り捨てられるようになってはいけない。そのためにも一人一人が賢くならなくてはならない。小田実さんは「一人でもやる。一人でもやめる」と言っていた。かつてトルストイは「戦争は人々が如何なる暴力行為にも参加せず、そのために蒙るであろう迫害に耐え忍ぶ覚悟をしたとき初めて止む。それが戦争絶滅の唯一の道です」と言った。また、僅か24歳で亡くなったイギリスのウィルフレッド・オーエンという詩人はその死後に出版された最初の詩集の序文で「不名誉な恥辱に耐えよ。だが決して武力に訴えるな。苛められて乱暴されても殺すなかれ」と今から100年も前に言っている。100年経っても真理は滅びない。今、一人一人が小さな勇気を試されている。小さな勇気は一人にとっては大きな勇気かも知れないけれど、イヤだということを言える人間でなくてはならない。新聞に『人を殺すくらいなら撃たれて死ぬという子は体育教師に愛されざりき』という歌が載っていた。そんな体育教師も中にはいるかも知れないが、お母さんたちはそんな子供をしっかりと抱きしめ

てあげて欲しい。「考える市民」になることをお互いにやっていきましょう。

3. 講演を終えて

講演終了後、壇上に上がり、澤地さんに花束贈呈をしたお二人の老女は、元水曲柳開拓団員であった桜井こうさん、原千代さんのお二人でした。今年91歳という桜井さんは、終戦の年の夏、沢山の女学生達が村に住み込みで手伝いに来てくれたということを鮮明に覚えておいででした。この日、後援に名を連ねた「水曲柳会」(元水曲柳開拓団員らの親睦組織)からも元開拓団員ら約10名ほどが会場で澤地さんのお話を聞き入っていました。

それにしても85歳、そして心臓手術もしペースメーカーも入れているという澤地さん、本当に精力的にお話しして頂きました。「澤地さんの体調にはくれぐれも気を付けてあげて」と沢山の皆さんから注意されていたのに、ご本人の「いいわよ」というお言葉に甘え、講演終了後にはサイン会やら共同記者会見までやって頂きました。澤地さんはその夜は同行された実弟の方と共に地元の名湯「昼神温泉」でゆっくりとお休み頂き、翌日には満蒙開拓平和記念館を訪問されました。その後、戦後、水曲柳開拓団員の人たちなどが再入植した開拓地を見てみたいというご希望で、当方の住む松川町増野にお越し頂きました。ここは両親を含む水曲柳などから引き揚げてきた元開拓団員らが「今度こそ本当の開拓」と鍬をふるった場所でもありました。都会育ちの澤地さん、「赤いリンゴが実際に木になっているのを見るのは生まれて初めて」と我が家のリンゴ園で嬉しそうにリンゴに触れられていました。絶好の秋晴れの中、「こんなに紅葉を見たのは生まれて初めて」と名残りを惜しみつつ、信州を後にされました。

沢山の感銘する言葉をお聞きした澤地さんの講演、「二度と国民が悲しい目に遭ってはいけない」という強い意思を感じました。実際に開拓団での生活を体験された澤地さんの言葉は、当時を知る一人の「語り部」の言葉としても私たちの心に沁みわたりました。

澤地久枝さんの今後の益々のご健勝を心からお祈り申し上げたいと思います。

(てらさわ・ひでふみ:1953年生まれ。満蒙開拓平和記念館専務理事、方正友好交流の会理事)



講演する澤地久枝さん



講演の翌日、記念館に寄られた澤地さんと スタッフたち

満蒙開拓平和記念館を訪れて

風間 成孔

戦後70年、わがふるさと信州阿智村に常設されている「満蒙開拓平和記念館」を訪れた。7月25日(土)に新宿から伊那行き高速バスにて中央道を4時間半乗車、上飯田バス停までお出迎え頂いた寺沢秀文専務理事の車で、我々3名は午後2時記念館に到着した。折りしも記念館のセミナールームでは、満蒙開拓団の語り部(私と同年代の男性)が終戦時満州から逃れてきた生々しい体験談を語っている最中であった。

長野県でも北信(長野市)で育った私には、この地南信(南信濃)の飯田・下伊那郡の一帯は かっては一日がかりの旅行となっていた。平成の大合併で島崎藤村の古里・馬籠は隣の岐 阜県中津川市に移行したばかりである。その手前の地籍に下伊那郡阿智村はある。

まず、記念館の概容はすでに「方正友好交流の会」で得た「満蒙開拓平和記念館図録」(2015.4.25 発行)で見ていた内容の期待以上であった。平屋建ての記念館は営林局が寄贈(3000 万円相当)したという廊下の立派な16本の地元の杉の木で屋根を支える吹き抜け構造は瓦屋根の重みをがっしり受け止めていた。展示物は要領よく分かり易いし順序も工夫されていた。中でも、満州開拓民入植図は義勇隊開拓団と一般開拓団とが広大な土地に示されていて、当時の規模が想像される。貴重な資料と「証言」は非常に身に迫る迫力があった。

日本全国から送り出された新天地・満州を目指した開拓民では、長野県が一番で、2位の山形県の2倍以上の3万3千人とあり、その理由が養蚕業の衰退による経済的困窮と耕地面積の狭さであり、補助金が得られる分村移民は、村々の不況と国策である満州移民が結びついていったとのことであり、それを聞いて非常に悲しい出来事であったと思った。

館内で一際目立つ「映像で見る満蒙開拓」はスクリーンの大きさが 2.5×5 メートルの壁に映し出される。当時の映像と写真がかっての満州の風景と開拓団の人々の姿である。当時、移民の形態の様子から、その分類が「試験移民(武装移民)」、「分村・分郷移民」、「満蒙開拓青少年義勇軍」、「自由移民」、「勤労奉仕隊」、「帰農開拓団(転業開拓団)」となっており、その名称に出身地の郷や村の名を冠しているものが多い。阿智村は「阿智郷開拓団」で175人中、戦後帰国できたのはわずか47人であったという。「残留孤児の父」と呼ばれる地元「長岳寺」の住職山本慈昭氏は、国民学校教員として家族と渡満、シベリアへ抑留され、昭和22年シベリアより引き揚げ帰郷した。帰国後、残留孤児の調査に奔走し、昭和39年周恩来首相と面会、昭和55年、初めて残留孤児の調査を目的に訪中し、一部の孤児たちと面接したという。厚生省が孤児訪日調査を開始したのは翌昭和56年(1981)からである。惜しくも平成2年(1990)に永眠された。長岳寺には「望郷の鐘」なるも

のが残されている。明治35年(1902)飯田市に生まれたので享年88歳となられる。

それにしても、私が信州育ち(東京生まれだが戦時中、両親の故郷長野市へ縁故疎開して 10 年間)のため、泰阜村の慰霊団が先に方正地区日本人公墓のそばに小さな木の植樹をされていたのに感銘を覚えた。私が中国方正県へ初めて訪問したのは、1993 年 10 月の国慶節の最中であった。一行はハルビン東方 180km にある方正まで、鉄道はなく車で、道は舗装されていないひどい道で大変な行程であった。

当時は、飛行機は北京から一日に数便で、午後は遅いと連絡便がなく、一泊し翌日ハルビン国際空港に到着した。この機会が与えられたのは、そもそも前記「方正の会」の前身の「方正地区支援交流の会」を通して方正県人民政府劉慶有副県長から丁重なる招請状が送られてきたからであった。当時、小生は東京都立衛生研究所食品添加物研究科長の現職であり、10月に北京飯店での第7回国際中草薬研究討論会に出席準備していたことを良い機会と捉え、支援交流の方々の訪中に合わせて方正県まで足を延ばした。

私の専門領域の優秀なシクロデキストリンの製造が当時の中国で可能となっていた背景はどうして成り立ったのか興味を覚えたからだった。

ここ方正地区がシクロデキストリン製造の拠点となった理由を知りたかったとき、図らずも石井貫一先生(「支援交流の会」会長)が、1994年10月に、このことに関する質問書を先に送り、私も訪問した時面談した、中国残留孤児である徐文峰工場長からその報告書が届いた。中文は薫力強女史の訳であった。こんなことも阿智村を旅して懐かしく思い出されるのだった。

(かざま・まさよし:1935 生まれ。東京都立衛生研究所食品添加物研究科長を経て現在、 (株シンギーの技術顧問。また薬剤師であり、臨床検査技師でもある)

「中国帰国者 戦後七十周年記念公演会」を鑑賞

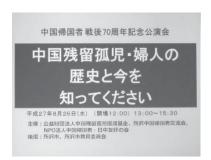
会員 吉川雄作

去る8月26日、所沢市民文化センターで開催された「中国帰国者 戦後 七十周年記念公演会」に、ちば帰国者支援・交流の会の一員として、座席を 与えられる幸いを得た。私的に撮った写真を主に、概要を紹介する。

主催は公益財団法人 中国残留狐児援護基金・所沢中国帰国者交流会・NPO 法人 中国帰国者・日中友好の会。今回は帰国者定着センターがある所沢市と市教育委員会の後援を得ての開催であった。

この日は、あいにくの雨の中ではあったが、東京・埼玉・千葉ほか、関東

一円から多数の帰国者・関係者が参加、500を超える会場は、ほぼ満席の盛会であった。





会は、主催者、厚労省、中国大使館、所沢市長の挨拶で開会。総合司会は帰国者三世の増山兄妹。既にこの世代が活躍するようになったことを頼もしく感じる。

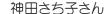
第一部「中国残留孤児・残留婦人のあゆみ」は、ノンフィクション作家の城戸久枝さんの語りと映像に加え、一人芝居『帰ってきたおばあちゃん』などの活動を続けている神田さち子さんの息の合った共演。 体験者ならぬ身にも、胸に迫るものがあった。

総合司会:増山 智/莉莉(中国帰国者三世)



城戸久枝さん





第二部は、帰国者による舞踏劇、合唱、独唱、器楽合奏、日本民謡踊り、雑技等々、いずれもプロに迫る多彩な舞台で、客席を魅了する。中でも NPO 法人 中国帰国者・日中友好の会の合唱の中でソロを歌った池田澄江理事長の歌は、会の最後を飾った舞踏劇「中国のお母さん」の集団演技のすばらしさと共に、特筆に値する。それぞれの戦後 70 年と、その前の苦難の歩みを思い、見る・聴く楽しさを超えた感動を与えてくれた。



★舞踏劇《孤児の涙──別離》 NPO 法人 中国帰国者・日中友好の会



★合唱

《心のお話》

《私のふるさと》

《天路》

NPO 法人中国帰国者・日中友好の会

*池田澄江理事長のソロが入る





★器楽演奏 《山丹丹開花紅艶艶》 《荒城の月》 NPO 法人中国帰国者・ 日中友好の会

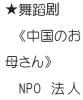
★日本舞踊 《島のブルース》 NPO 法人中国帰国者・ 日中友好の会





中国帰国者・日中友好の会

終演後 主催者・出演者 全員が登壇





鳴りやまぬ拍手の中で 閉幕

ある中国残留孤児が綴る『この生あるは』を読む

石尾 喜代子

中島幼八さんは、かつて私の勤務した日中友好協会の同僚である。1966 年 3 月末に、私は学校を卒業してすぐに大阪から上京し、飯田橋の善隣学生会館(いまは取り壊されて財団法人日中友好会館が建っている)の1階にあった日中友好協会に勤務した。ちょうど同じ時期に、中島さんも事務局に入ってこられた。この年は、中国では毛沢東主導の下、プロレタリア文化大革命が勃発したこともあって、日中友好協会はこれを批判する「共産党系」と、大衆運動ではこれに対する賛否両派があるのは当然であるという「非共産党系」の二つに分裂、その後「日中友好運動」はしばし混迷の状況下にあった。そういう状況下であったために事務局に勤務した人々は、その後の人生は様々な道を歩むことになった。私は、「非共産党系」の組織を選んで、1969 年 3 月まで勤務していた。中島さんも同じ組織に所属していたので、約 3 年間は同僚であったが、その後の中島さんがどのように生きておられるかは全く知らなかった。

その後、90年代末になってから、戦後日本と中国が国交のない時代に苦労を共にした方々の老齢化もあり、当時の協会で働いた人々の新年会が開催されることになり、30年ぶりに中島さんと再会した。

今年の新年会の席上で、中島さんは「僕はいま日本語と中国語で自分史をまとめている」と挨拶された。それを伺ったときから、完成したらぜひ拝見したいと思っていた。中島さんは、勤務された当時、「中国人が入って来られたのかな?」と思ったくらいに、お話してもまだまだ中国人という方がぴったりする青年であった。しかし、そのことは当時は特別珍しいことでもなかった。というのは、戦後中国から引き揚げ船で帰国された日本人、特に旧満州(現在は中国東北3省)からの帰国者は多かったし、そういう方々は、帰国後、日中友好協会の会員となって地域で活動している方たちが多かったからである。

30 年ぶりの再会で交わした名刺で、中島さんは翻訳・通訳の会社を経営しておられることを知り、あの幼八さん(みんなが親しみを込めてそう呼んでいた)が立派に自立されて日本社会に根を生やして日中友好の仕事をしておられるのだと敬服したのだった。

私は、中島さんより1歳年下であるが、東京で生まれ、関西で育った。「大毎」の記者だった父親は、兵隊として召集されて中国大陸に行った。父親は、仕事柄、家にゆっくり過ごすことは少なかったが、家にいる時には社会や政治の話をすることが多かった。戦争については、私が幼いころからその体験を話し、「新中国」についてもいろいろ話してくれた。日本は中国大陸で侵略戦争をしたこと、当時の中国人の生活はとても貧しく、戦地で知った情報から、毛沢東率いる八路軍が人民の支持を得ているということを知ったこと、多分

この戦争は日本軍が敗戦すると確信したことなどを話した。そういうことが私がのちに国 交のない時代に日中友好運動に参加させることにもなった。

私自身は、69 年に日中友好協会を辞めたのちも日中関係団体に勤務し、仕事で中国を訪問する機会は多かった。しかし、中国が「改革・開放」政策に転換してからの中国への関わりは、経済団体で勤務していたということもあり、中国について勉強するといっても、経済に関する書籍を読むことが多くなった。学生時代には、日本の研究者が書いた中国近代史や、中国で出版された「抗日戦争、愛国闘争」を描いた小説類などを読んではいたが、日中戦争についての本格的な勉強は不足しており、かねてより敗戦後も旧満州で残留日本人として生きざるを得なかった同胞の事情や、図らずも異郷で生きざるを得なかった残留日本人に対して中国人民はどのように対応していたかを知りたいと思っていたので、早速中島さんが書いた本書『一中国残留孤児がつづるこの生あるは』(自費出版、幼学堂刊)を読まなくてはと強く思った次第である。

以下はその感想である。

これまで私は日本で出版された旧満州引き揚げ記録の類いの書籍はかなり読んでいる。その多くは、敗戦後の旧満州で繰り広げられた引き揚げ時の悲劇を描いたものが多く、それも想像を絶する悲劇が多いのである。そういう中で、本書は、幼児が実の親と別れて養母と暮らした日々を克明に描いているのが特徴であり、おそらく実際には著者も多くの苦労は味わっていたのであろうと思うが、描かれた場面は、貧しい中でも愛情を注いだ養母や養父のことがじつに生き生きと描かれている。戦争で東京から和歌山の田舎に疎開して小学校3年までそこで育った私には、幼児の折に野山を駆け巡った日々、貧しいが自然豊かな日々の生活から多くのものを学んだという「記憶」と重なってくるのが不思議な思いであった。

"数奇な運命を乗り越えた人生"といえば、人々は"残酷""壮絶""悲壮"という言葉を思い浮かべるであろうが、本書を読む者には、旧満州の豊かな美しい自然の中で、善意のひとびとに包まれて素直な少年から青年に育まれてゆく姿が彷彿とする。そこで著者が描こうとしているのは、"血のつながりを超えた肉親の愛" や "寂しさも忘れさせてくれた自然豊かな故郷への愛" そして"懐の深い中国の庶民の温かさ"である。

それだけに、突然やってきた「帰国」のために、"家族との別れの挨拶ができなかったことへの悔恨、家族に対して感謝を伝える機会を逸したことへの悔恨"を十分に描けないもどかしさが伝わるような終章には、著者の思いが読む私にもよく伝わってきて、胸が熱くなったのである。そういう意味では、本書の構成はうまいし、気取らない文章もとてもわかりやすくて説得力がある。それが実は中島幼八さんという人の人格から来るものだろうし、そういう人物に育ったというのは、養父母のみならず、著者が現地で教育を受けたということも大きく関係していると思う。

私はかねてより「中国は教育立国だ」という思いを抱いている。そこで育った中島さん

にとっては、現地での体験は中島さんの人格形成には「よかった」かもしれない。読後、 私はすぐに中島さんに短い感想の手紙を書いた。「文章がうまいので驚きました」と。初め て一緒に仕事をしたときの中島さんからは想像もできない、その後の成熟した人生を感じ たからである。"中国残留孤児"という体験を乗り越え、自らを客観的に見つめるまでに人 間として成熟された中島幼八さんにただただ脱帽した次第である。

最後に忘れてならないこと。それは本書には中島さんと同じ"残留孤児"という運命を 辿った多くの人々が登場する。その人々のその後の運命はいかに?という思いである。語 られぬ悲運な人生を歩んだであろう"残留日本人"もいまだに現地に生きているというこ とを思わざるを得ない。その人々ももうすぐ鬼籍に入るころだが、私たちはそういった「同 胞」のことも決して忘れてはならない。

戦後70年の今年も暮れようとしているが、安倍総理が強行採決して可決した「集団的自衛権などの安保法案」は、来年以後施行されることになる。そういう中で、私たちは、この戦後政治を根底から転換して、米国との軍事同盟を基軸に東アジアで「中国けん制外交」を展開して行こうという現在の自民党政権には極めて危いものを感じている。いつ何時、日中間に火ぶたが切って落とされるかもしれないという緊張感があるこの局面を、「日中友好関係再構築の機会」ととらえて、「平和で、友情あふれる両国関係へ」と転換する取り組みをしなければならないと強く思うのである。それが、残された「同胞」たちへのせめてもの「同胞愛」であり、また、"同胞残留日本人"への"恨みを超えた民衆同士の愛と友情"を注いでくれた中国人民への"心からの感謝とお礼"でもある。

(いしお・きよこ:1943年生まれ。1966年より日中友好運動に入る。69年より出版社での編集業務を経て日中経済団体で経済交流、日中友好会館で日中青少年交流、教育交流に携わる。現在はボランティアで北東アジア共同体活動に関わっている)

『この生あるは』の粗筋

中国残留孤児だった著者は、日本の敗戦当時、3歳だった。瀕死の状態のなか、中国人養父母に引き取られ、元気を取り戻す。実母は引き揚げで、養母との間で子どもを取り返そうとする。役所の裁定で、子どもは養母のもとに残ることになり、それから13年間中国で育てられる。その間養父が三人も変わりながら、中国社会の移り変わりのなかで、中島少年はけなげに生き延びる。その後中国紅十字会の援助で実母の消息がわかり、16歳で舞鶴に帰還を果たす。全編を通じて中国人民の善良さがほのぼのと描かれた物語である。

■ 本書を入手されたい方は、中島幼八さんにご連絡ください。090-9146-8008 または中 国専門書店の亜東書店で扱っている。

忌まわしい負の事実を問う

小林節子著『私は中国人民解放軍の兵士だった

―山邊悠喜子の終わりなき旅』を読む

石飛 仁

日本と中国の戦前戦後の関係史には、今も尚多くの戦争の傷痕が残っている。一部では 化膿して永遠に治療が出来ないのではと思いたくなるほど悪化しており、その爛れぶりは 年々深刻にさえなっている。戦後は70年にもなるのに一向にその傷が癒えないのはなぜか、 ということをもっともっと真剣に事実を掘り起こして確認し、事実をして特効薬を見つけ 出し完治するまで徹底するしか方法はないと私は思っている。

その意味で"終わりなき旅"として書かれた小林節子作『私は中国人民解放軍の兵士だった』(明石書店刊)の主人公、山邊悠喜子の問題提起は重要である。

1945年夏の皇軍(日本軍の事)の敗北により、満洲から引き揚げを待つ16歳の身であったが彼女は、一年後に引き揚げた家族と別れて中国に残留し、内戦勝利をめざす中国共産党軍(東北民主連軍)の進軍にともない医療団として「留用」され、これに同行しているという稀有な体験者である。

戦争体験を自然災害でもあるかのように語る人はいても、その体験を戦後史に活かす人はきわめて稀である。復興や再建に追われる庶民は、必死に目の前のことだけをこなして生き抜くしかないので、自らの苛烈な体験を活かして日中不再戦運動たる「草の根平和運動」を、両国を往き来して実際に続けることはとても難しいことである。その難しい道を山邊悠喜子は、一歩一歩かみしめるように歩み生きてきた。「中共帰り」と白眼視されてきた山邊悠喜子が、本書の最終章でわれわれに突きつけている問題提起は極めて重要な指摘がある。

中国共産党による「留用」

その重要な問題提起に触れる前に、日中関係史をひも解く上でも、欠かせない「留用」体験のことに若干ふれておきたい。新中国建国に貢献した残留日本人の「留用」についてはあまりにも不明な点が多く、これまでその実態は知られないできた。百万人がいたという満洲国における日本人引揚者のなかに「留用」員として戦後も中国に残留した人は、家族を含めて二万人がいたといわれている。日本の敗戦は、ポツダム宣言の受諾に伴ない、満州国にいた日本人は、本土と云われていた日本列島への引き揚げが決定し、各地から一斉に本土への引き揚げが始まった。だが、満洲国では事情が複雑化していた。降伏直前に

ソ連が中立条約を廃棄して日本と戦っている連合軍に加わり満洲に攻め込み、満州国軍(実 質は関東軍)を屈服させ満洲から北朝鮮までを接収した。ソ連軍による日本人への暴虐が 発生したのはこの時期のことである。ソ連軍の捕虜となった関東軍 60 万人は、沖縄救援に 移動中北朝鮮にいた部隊も含めて、ソ連の捕虜収容所に連行され過酷な労働に従事し大数 の死亡者をだしていた。ソ連軍が、占領した東北(旧満州国)から戦利品を持ってソ連領 に引き上げたのは、1946年の春である。そこに蒋介石国民党軍が入れ替わるように乗り込 んできた。この時は同時に共産党支配地域にいた日本人引揚者と共に引き揚げ事業が行わ れ、敗戦一年後に主に胡蘆島から大半の日本人は引き揚げた。しかし、この時点で中国側 から日本側に要請が来た。実際に都市インフラと工場生産ライン、鉄道等を維持するには、 日本人の技術者がどうしても必要だという中国側の要請が来たのである。残留して技術移 転が出来るまで指導して欲しいというものだった。全員の引き揚げが無条件で進められた 引き揚げ事業であったが、希望者をつのるという方法で、残留者が出た。部門は多岐にわ たり医師・看護婦の病院等医療関係者で5000人、そのなかには不傷兵を運ぶ担架要員や、 トラック運転手等が含まれ、工場、鉱山、鉄道の技術者 6000 人、電気・ガス関係者、それ に中国空軍の創設に協力した林部隊300人や、映画製作所の100人等が「留用」員として 中国に残ったのである。(国際善隣協会発行『善隣』2015 年 10 月号、武吉次朗講演「新中 国に貢献した日本人たち―「留用」の史実の全貌―」より)

この「留用」員は、すぐに始まった共産軍と国民党軍との内戦に従軍していくことにな った。本書の主人公山邊悠喜子は、『東北民主連軍』(人民解放軍)の一員となって、蒋 介石国民党との内戦に参加し、一時は北朝鮮まで後退し医療活動員をつづけ、望郷の念に かられたりするが、次第に攻勢を強める正式名「中国人民解放軍第四野戦軍」の組織隊員 として、北京から更に南方へと従軍する。従軍中に夫となる山邊賢蔵は、「留用」された 林部隊では航空整備兵だった。彼は、中国軍と共に移動する留用日本人のまとめ役として、 破竹の勢いで国民党軍を追撃する部隊のリーダーだった。二人は、1951年仲間たちに祝福 されて桂林の教会で結婚し、家族をもうけ。1953年3月、「留用」員の帰国が新中国と日 本との間で赤十字を通して協約が整い、5年間で20回の帰国団の一員となって帰国してい る。しかし、帰国した祖国日本では、新しく中国大陸を統一した北京の毛沢東主席の中国 政府を敵視する政策がとられていて、新しい誤解が発生していた。確かに経済大国へ驀進 する日本は、戦争特需等で奇跡の復興を誇ることになるが、苦労して新中国建設に参加し た「留用」時代の充実した日々の方を夫も彼女も尊いものに思えてならない。人間として 大きな価値を教えてくれた中国の民衆たちに、戦争の暴虐をくぐり抜けてきた人間ならで はの力強い集団の姿を見てきた経験が二人にはあった。上っ面の謝罪や歯が浮いたような 軽い身のつかないお詫びを繰り返すだけの民主や革新を口にする日本人の中に、山邊悠喜 子は欺瞞を見つけるのである。

2000年、鹿島和解の欺瞞を告発

本書では、第一章で、花岡事件鹿島交渉の中に潜む不当性を取り上げている。 5 億円を 鹿島から受け取って和解し交渉の幕引きを図る弁護団長側と、この内容では和解はできな いとする原告団長の耿諄との間に存在した「騙し」の構造に光を当てている。おそらく「留 用」という戦争体験をバネにして、それを活かしていなかったとしたら、和解交渉に隠さ れてきた「耿諄を騙して和解した」その構造に踏み込んで、その不当な点を暴くというこ とまでは出来なかったであろう。常に戦争反対を叫ぶ善意の中にまで忍び込むスパイのよ うな真顔の「騙し」の連続に気づいて、それを摘出した山邊の力の源泉は、「騙され」続 ける庶民たちを自分と重ねて、為政者を疑う力があるから出来るのだろうと思う。これは 必ずしも階級史観におぼれる必要のない人間主義だと私は思う。

戦争の暴虐を繰り返す為政者を告発することは、国家主義を超えた話である。

七三一部隊の問題、万人坑の問題、「華人労工」移入政策の破たんとしての花岡事件耿諄騙し問題等、軍国日本帝国主義が抱え込んだ負の遺産に、山邊は同志たちと細々と取り組んできている。そこに避けては通れない人類史上の負の問題と格闘する姿が横たわっている。べっとりと血糊が付いて、いつまでも回ってくる忌まわしい事実を問う姿勢の堅持は、ものすごく大事なことである。少なくともアジア解放戦線に走って国民総動員の果てに積み重ねた犯罪の総量について精査しておくことは国民の責務でなければならないのである。事実を積み上げて教訓とする道のみが「騙し騙される」悲劇を克服していくことになるからである。

(いしとび・じん:1942年生まれ。ルポライター、劇作家、演出家。著書に『花岡事件鹿島交渉の軌跡』『甦れ古代出雲よ』他。東京東アジア文化交流会主宰、「七月一日花岡事件慰霊供養の集い」実行委員会代表)

戦後 70 年、

『「北支」占領 その実相の断片』を刊行して

田宮 昌子

本書(社会評論社刊)は副題を「日中戦争従軍将兵の遺品と人生から」とするように、日中戦争に従軍した日本軍将兵の遺品を、主に中国山西省従軍期の写真を中心に、裏付け調査と現在の視点からの考察を加えて公開しようとするものです。

第一章では、山西省盂県を中心に、占領の拠点となった県城、占領と抵抗の攻防が繰り返された城外の農村地帯、遺品写真に映し出される占領の具体相、占領軍と現地住民の間に立たされた「対日協力者」の人生と遺族たちの現在、の4節に分けて、ほぼ八年に及んだ「北支」占領の実相に迫ります。特に第1節において内陸部の小さな街の「占領期」を詳細に再現することで「事実としての」占領を読者に伝えようとしています。

日中戦争といえば、一般に知られるのは盧溝橋事件と南京事件の名前が辛うじて知られる程度ですが、一時に大量の犠牲者を出すような規模の大きい軍事行動は戦争初期に集中し、戦争期間の主体を占めるのは占領維持という、現地社会に外国軍支配下での生活を強いる状態です。現地社会では八年もの長きに亘って迎合と抵抗がせめぎ合い、何世代もの人々が緊張や矛盾や葛藤の中に本来あるはずだった人生を失いました。その間、小規模の犠牲は無名の集落や街角で常に起こり続けました。こうした実態に筆者もこの作業に取り組むまで深く思いを致したことがありませんでした。占領が現地社会に与えたもの、奪ったもの、残したもの、これらについて、日本社会が全く知識を持たず、よって思いを致すことが全くないことが、日中両社会と国民の相互理解を阻害していることは間違いないと思います。

第二章は、元々は第一章でしたが、作業を進めるうちに、「占領」という日中戦争の「実相」が主題として浮上し、二章に「後退」したものです。ここでは、本書の出発点となる遺品を残した筆者の伯父・田宮圭川について、個人の人生と時代との関わりをみるべく、禅僧であり教員である「聖職」者が、下級将校として「北支」戦線に派遣され、沖縄に転戦、玉砕に終わるまでを、遺品写真を手掛かりに再構成しています。

第三章では、占領の時代を生きた個々人は如何にして「それ」を担ったのか、現代を生きる人間の問題意識から、「三人の三重県人」の遺品写真に加え、彼らが遺した従軍記念品、新聞記事スクラップ、文章を解読しています。

最後に加藤修弘氏による解題を付しています。加藤氏は独立混成第四旅団、特に 圭川が配属された独立歩兵第十四大隊について、元駐屯地の現地住民や元兵士への 聞き取り調査、旧日本軍史料の解読など、調査と研究に長年当たって来られました。 このため、日中戦争期の山西省や盂県の状況および背景にある戦況や政治動向につ いての解説を、更にはその中にあった圭川の従軍について、専門的見地からの考察 と批評をお願いしたものです。

筆者としては、拙著の意義は「往来性」と「対話」にあると考えます。遺品写真を色あせた標本のごとく羅列するのではなく、現地調査を通して、今日の視点および現地社会や住民の視点から見つめ返すことを試みています。出征将兵が残した遺品を戦地とされた側の視線を意識して見つめ返すことは、それらの遺品を単なる懐旧や自己弁護の材とする結果に陥る愚を避けるために必須であるはずではないでしょうか。これらの写真に残る場所は実在し、その地に立ち、その跡を見、写真に写る当人や縁者の声を聞き、自身の言葉を伝えることも今日辛うじてまだ可能です。読者には「『北支』占領」を自身は安全圏から眺められる括弧付の「歴史」としてではなく、今日と読者自身に繋がり得る切迫感ある「事実」として伝えたいと願っています。

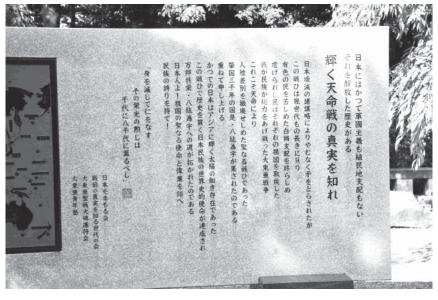
(たみや・まさこ:1961年三重県生まれ。大学を卒業後、中国向け出版・広告会社の向陽社などの勤務を経て母校の愛知大学大学院に進学。中国研究科博士後期課程満期退学。現在、宮崎公立大学人文学部准教授。中国文化論(中国文学・中国思想)

「大東亜聖戦大碑」について(続)

满蒙開拓平和記念館 専務理事 寺沢 秀文

前号の「星火方正」20号にて金沢市の石川県護国神社にある「大東亜聖戦大碑」について触れさせて頂いたが、その時に写真を掲載出来ませんでした。今年5月に訪れた時の写真です。このような大碑が建てられていることに改めて驚きを隠せません。





周恩来と国際主義的精神 (第2回)

大類 善啓

≪前回までの粗筋≫ 周恩来は、1898年3月、現在は淮安と呼ばれている江蘇省淮安府山陽県で長男として生まれた。本籍は浙江省の紹興である。周一族は300年前から紹興に住んでいた。紹興は12世紀からイスラム教徒が住んでいた国際的な町だった。周は「私の一族にもきっと少数民族の血が混じっているに違いない」と、周の詳細な評伝を著したハン・スーイン(韓素音)に語っている。生母は周が4歳の時に亡くなった。父は後妻を迎えた。周の極めて濃やかな心配りは、このような環境に生まれたこと、また長男という意識も大きかったのではないか。父の仕事の関係で、周は瀋陽で働いていた伯父のところに呼び寄せられ、遼寧省鉄嶺の銀崗書院で学び、その後、瀋陽で開設された奉天東関模範学校に入学した。家を離れ、東北に行ったことは周恩来にとって、生活や思想を大きく変える鍵になったようである。

8) 天津の南開中学へ

1913年の春、伯父の貽賡が天津で仕事をすることになった。周恩来も天津に移り、南開中学に入学することになる。

南開中学は欧米の教育制度を見習って 1904 年、教育者で改革主義者である厳範孫と、アメリカで教育を受けキリスト教徒だった著名な教育者・張伯苓によって創立された進取の気風に富んだ学校である。

天津は、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、そして後には日本の租界があり、そこでは中国の司法権が及ばなかった。租界にはターバンを巻いたインドのシーク教徒やコルシカ系のフランス人警察官、イタリアや日本の衛兵たちが、それぞれの領土である租界を守っていた。その影響もあって天津の書店には、西洋の本の翻訳書やさまざまな定期刊行物が並び、周恩来を刺激した。周は南開中学の寮に住んでいた。学費は伯父の援助でやりくりしていたが足りなかった。学校の外の路上で、屋台の豆腐のスープや高粱の粥を買って食べるような周の貧しさに気づいた厳範孫と張伯苓は、周を援助し、学校の謄写版のガリ版切りや図書館の本の分類などのアルバイトをさせたという。

全科目に優秀だった周恩来は二年次からは、南開中学でただ一人授業料を免除されることになったが、時には本を一冊買うために食事を抜くこともあった。その習慣が逆に彼のスタミナ源にもなったという。「決まった時間に食べたり眠ったりする必要はない。規則正しい生活は精神を硬化させる」と後年、周はそんな体験から得られた生活の哲学ともいうべきものをハン・スーインに語っている。

よく知られているように、総理になった周恩来は深夜まで文書のチェックや外国からの 賓客と懇談をし、就寝は明け方、起床は昼過ぎだった。しかし 1972 年の日中国交正常化の 際、交渉相手の田中角栄が早起きの習慣だと知った周恩来は、交渉に備えて、田中と同じ 早朝の時刻に起きるようにした。

「規則正しい生活は精神を硬化させる」という周の言葉は、精神の柔軟さ、臨機応変に

物事を対処する周恩来の生き方を示唆していると言えるだろう。

9)「困っている友だちのためなら何でもする男」

周恩来は文芸を好んでいた上、校長の張伯苓は自身で脚本も書くような才人でもあり、 学内で結成された新劇団に周は参加した。当時の社会では封建的な慣習が強く、男女の学 生が同じ舞台に立つことはなく、また南開中学は男子校でもあり、周恩来はそのため女役 に扮して舞台に立った。当時、女役で出るということはなかなか勇気がいることだった。

周は「一元銭」「華娥伝」「千金徳」「仇大娘」などの新劇に出演し好評を博した。その役者ぶりが「第十期卒業同学録」でこう記されている。

「君の新劇における特徴は、姿形を犠牲にして、化粧をして舞台に出て、全観衆を熱中させたことで、およそかつて南開新劇を観た天津人で、君の名を耳にしないものはいない」 (『人民の宰相』)

感性が豊かで、同時に自制心にも富み、長い沈黙に耐えることができる周恩来は全幅の信頼を友人たちから得た。「彼は、困っている友だちのためなら何でもする男だ」(『長兄』)といわれるほどだった。

中国では友情がとりわけ高く評価される社会であり、周恩来に対するこのような評価は何ものにも換えがたい賛辞といえるだろう。

張伯苓と共に、南開中学を創設した厳範孫は、周恩来の人柄にたいへん惚れ込み、ぜひ娘婿にしたいと思った。しかし、この話を仲介にきた友人に「私は貧乏学生だ。有力な厳家との縁談を承諾したら、あらゆる事柄に関して厳家の指導に従わなければならなくなるだろう」(『長兄』)と言ってこの話を断った。厳はこれを聞いて、ますます周恩来に感服するようになったという。

10) 日本へ旅立つ

校長の張伯苓は周恩来に対して、海外留学、特にアメリカへ行くことを勧めた。しかし 経済的な余裕はない。しかし近い日本なら可能かもしれないと思った。南開中学出身者に は日本へ行った者が多かった。しかし当時の日本は中国に敵対的な政策を取っていた。そ こが周をして日本行きを躊躇させる要因だったが、張伯苓は「我々はまだ日本から学ばな ければならない。日本が西洋から学んだように」と語った。周恩来は友人たちに別れて 9 月、天津から船に乗り日本へ向った。

その友人たちへ送った別れの詩は、翻訳家・林芳女史の訳では、次のようなものになる。

大江 うたい罷めて頭を東に損け 社会の科学をきわめ 窮れる世を救わん 十年壁に面いて壁を破らんと図るも 酬われ難くして 海に投ずるや また 英雄なり

十年間壁に向ったのは達磨大師である。周恩来はこの時、19歳である。達磨大師のような心境だったのだろうか。後年、仏教にも深い関心を寄せていた下地はこんなところにすでに表れていたのだろうか。

ハン・スーインも、「彼は六世紀に中国に来たインドの僧を開祖とする禅宗に関する本を

読んでいたに違いない。周の詩や日記の記述のそこかしこに、仏教の影響、真理の探究の 跡が見られる」と『長兄』に記している。

筆者(私)の親しい敬虔な仏教徒である若い中国人は、周恩来は虚雲という老師に敬慕 し仏教の教えに深く傾倒していたと証言する。周恩来と仏教との細かな関係は、いずれ歴 史が明らかにしてくれるであろう。

11) 社会主義への目覚め

日本に渡って東京にやって来た周恩来は、千代田区神田神保町にあった東京高等予備学校に入学し、日本語の試験に備えた。当時、官立の東京第一高等学校か東京高等師範学校に合格すれば、清朝政府から奨学金がもらえた。

『周恩来「十九歳の東京日記」』(矢吹晋編/鈴木博訳)を見ると、日本語の勉強の他に、 友人たちとの談論、時には当時の最も華やかな繁華街だった浅草に足を延ばし、芝居や映 画を楽しむ周恩来がいる。

1918年1月5日の日記の最後に「食事のあと、楊伯安のところに行き、かなり長いこと話し合い、いっしょに浅草に映画を見に行った。下宿に戻ったときは十時をまわっていた」。翌日の6日の日曜日には、「夜、みんなで浅草に出かけてオペレッタを見た。すべて日本語だったので、さっぱりわかなかったが、ダンスだけは悪くなかった」。

5月28日(火)はこんなことを記している。「今日は非常に憂鬱だった。夕飯のあと、独りで神田劇場に歩いていって芝居を見たのは、気晴らしのためだった。現在、家も国も艱難に見舞われ、友人が辛苦をなめているときに、どうして楽しむことができよう。 <酒を思う存分飲んで放歌高吟し> て、胸中の煩悩を思い出すようなものにすぎない。劇場で上演されていたのは、歌舞伎と新派であった。新派の内容はまあ悪くなかった。いま、それを記しておこう」と書いて詳しく粗筋を紹介している。

周恩来は、中国では食べなかった魚にも親しみ、また経済的な理由から、安い豆腐を食べることも多かった。新中国建国後、日本からの訪中団のメンバーに、「(中国の豆腐より)日本の方がずっとおいしい豆腐がありますね」と語っているところがある。

後年、外国からの来訪者では最も日本人との面会が多かったのは、それだけ日本を重視したこともあったろうが、日本人の習俗、慣習などを知悉し、日本に親しみを持っていたとも言えるだろう。

しかし二度の受験は日本語の成績が良くなく不合格になってしまった。最終的に周恩来は 1 年半ほどの日本滞在で帰国することになったが、この初めての外国体験はその後の人生で大きな位置を占めたといえるだろう。

その理由の一つが社会科学への目覚め、とりわけマルクス主義への関心である。

1918年4月、周恩来は神田神保町の書店、今も現存する東京堂で、新刊雑誌『露西亜評論』を読み、ロシア革命と社会主義制度について認識を深めた。その後、河上肇の『貧乏物語』や幸徳秋水の『社会主義の精髄』なども読んでいる。

その夏、日本全国で米騒動が起こった。周恩来もその影響を受けた。日本から帰国した後、周は『南開日刊』(1919年7月12日)に、「日本の米騒動、朝鮮の独立運動といったこれらの流れは、すべて世界の新思潮であり、東アジアの歴史上、国民の自覚を増加させ

た功績」とはっきりと指摘している(『人民の宰相』)。

もちろん 1917 年 10 月のロシア革命は日本の知識人に大きな影響を与えたと同様に、周恩来も影響を受け、彼が理想とする革命モデルになった。

1919年3月、周恩来は母校の南開中学が大学部を開設するというニュースに接し、帰国を決意、東京を離れ帰国の途中、京都の三高(現京都大学)で学んでいる南開中学の同級生を訪ねている。その時、嵐山や円山公園を散策し、有名な「雨中嵐山」という詩を残している。

12) 帰国後の天津で「五四運動」に出会う

1919年4月11日、神戸から貨客船に乗り、4月末天津に着くや、すぐに起こったのが「五四運動」である。

第一次大戦後のパリ講和会議で、山東省・青島のドイツ利権が中国に返還されず、日本に与えられようとした。これを知って怒った中国の学生3000人は5月4日、北京の天安門に集合し、日本製品の排斥などを主張してデモを行い、親日派の官僚たちの邸宅に押しかけた。

天津でも抗議デモが起こり、1万人以上の学生が授業ボイコットに参加した。周恩来は帰国したばかりだったが、南開中学の学生時代、雑誌などの編集をやっていたことを多くの人が知っており、すぐさま「天津学生連合会報」の編集長になり学生運動に入って行った。この運動の過程で周恩来も逮捕され、また後に妻となる鄧頴超と知り合い、交友が始まるのだった。

周恩来は獄中の仲間たちとハンガーストライキに突入。また鄧頴超らは「男子学生たちを釈放しなさい。代わりに私たちが牢屋に入ります。私たちも学生代表なのですから」と訴えた。このような動きを中国全土の新聞が報道した。周恩来らは一躍、英雄になった。しかし結果的に周恩来は、逮捕と投獄で南開大学の学籍を失った。しかし彼には、次の舞台であるヨーロッパが待っていた。

13) パリで革命家として頭角を現す

その頃の中国国内では、ヨーロッパで働きながら勉強する「勤工倹学」というフランスへの留学運動がブームのように広がっていた。1917年に帰国した蔡元培は北京大学学長に就任し、向学心に燃えるが自費で外国留学ができない青年たちに、フランスで働きながら学ぶという方法を積極的に奨励した。フランスでは労働者が不足しており、外国人労働者の受入れに熱心だったのである。

周恩来は更に深く思想を究めようと、この方法でヨーロッパへ行こうと決意した。南開大学の創立者である厳修は周恩来を見込み、ヨーロッパへの留学を全面的に支援してくれた。鄧頴超は、家が貧しく断念せざるを得ず、周恩来を見送った。

1920 年 12 月、上海からフランス郵船で周恩来はマルセイユに着き、パリに入った。周恩来は自ずと西洋思想に親しんだ。天津時代はフランス租界に鄧頴超が住んでいたこともあり、よくフランス租界に出入りしていた。周恩来の国際主義的な思想を育んだ土壌は天津という地も影響しており、またヨーロッパでの体験は更にそれを補強するものだったと

いえようか。

周恩来は英文で『共産党宣言』や『空想から科学への社会主義の発展』、『家族、私有財産、国家の起源』などを読み、マルキシズムに親しむ一方、アナーキズム、フランスの労働組合主義などの研究も行っていた。

パリはフランス革命の発祥の地であり、また世界の革命家たちの亡命先でもあった。ロシア 10 月革命を指導したレーニンやトロッキーらがパリに住んでいた時期もある。ロシアの作家イリヤ・エレンブルグもベトナム革命を導いたホー・チ・ミンもパリにいた。

若き革命家たちの自由な精神を育んだパリは、ヨーロッパ社会の自由な精神を象徴していた。しかし周恩来は革命家への道が厳しいものであることも知っていた。パリに着く前年の1920年、ドイツの革命的な左翼の指導者であるカール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルグが官憲に暗殺されていた。

1921年にはフランス共産党も設立され、作家のアナトール・フランスやアンリ・バルビュスの支持を得ていた。激動のヨーロッパの中心であるパリにいた周恩来は肌で国際環境の厳しさを実感すると同時に、革命への活力をも吸収もしていた。新しい時代の風は確実にヨーロッパに吹き荒れていたのである。

ともすれば外国にいると故国を思い母国を懐かしく思って愛国の情が湧いてくるものである。日本人も日本にいる時は国際主義者だったが、外国に行くとナショナリストになってしまう、ということはいつの世でもあることだ。

しかし周恩来はそうならなかった。当時のソビエト革命の動向を見て、国際的な連携の 大切さ、とりわけ労働者階級の国際的な連帯が重要であることを周恩来は肌で感じるよう になったのは4年間のヨーロッパ生活だったといえるだろう。

マルクス主義という国際主義的な思想の洗礼を周恩来は日本で受けたが、本当にそれを 身体で感じて受け止め、揺るぎのない思想にまで高めたのはパリをはじめとするヨーロッ パでの生活体験だったのである。

パリでは終生の友ともなった陳毅と知り合い、朱徳とはベルリンで出会っている。周恩 来がベルリンで朱徳と一緒にベートーベンの交響曲を聴いた仲だといえば、周恩来の醸し 出す文化的な雰囲気も頷けるかもしれない。

周恩来はまたパリで愛を育んでいた。周恩来がパリ時代、一番多く手紙を出していた相手はやはり鄧頴超に対してだった。外国にいる孤独感と、中国を革命するという周と鄧の思いは恋へと昇華していった。一説によると4年間のヨーロッパ滞在中、周恩来は友人たちに何百通の手紙や葉書を出したが、一番多かったのはやはり鄧頴超宛てであり、その数は250通にもなったという。鄧頴超は後年、ハン・スーインに「私たちは文通しているうちに・・・恋に落ちたのです」(『長兄』)と語っている。

14) 中国に帰国し鄧穎超と結婚

中国に帰国する際、旅欧中国共産主義青年団執行委員会は、周恩来に対して次のような評価を与えている。「誠実温和で活動力に富み、話し方は人を引きつけ、文章作成は迅速で、主義に対して深く研究し、したがって完全にプロレタリア化できる。英語が堪能で、フランス語、ドイツ語でも本や新聞が読める。旅欧区で発起人の一人である。旅欧区の執行委

員を三度つとめたことがあり、熱心で困難に耐え、成績は顕著であった」(『人民の宰相』)。 まさに革命家になる資質が充分に備わっている男といえるだろう。

ヨーロッパ滞在中には、華僑とのつながりも持つようになった。新中国建国後も海外の 華僑との連携を常に考えていたのは周恩来であり、具体的に海外華僑との窓口を務めてい たのは廖承志だった。

周恩来は1924年7月、中国共産党中央の指示に従いフランスから帰国し、すぐに広州で 黄埔軍官学校の政治部主任になった。

もともとこの学校は第一次国共合作成立後の1924年、広州で開校した。孫文とコミンテルン代表のマーリンとの会談で設立が合意されたものだった。学校の総理は孫文、校長は蒋介石、学校の党代表は廖仲愷である。廖仲愷は国民党左派の重鎮であり、日本と馴染み深い前出の廖承志の父親である。

広州には天津地区委員会女性部長を務めていた鄧穎超が広州に派遣されていた。1925年8月8日、この広州で周恩来は鄧穎超と結婚した。時に周恩来は27歳、鄧穎超は21歳である。周恩来は、一度は別の女性に心を奪われそうになったこともあったが、革命家の伴侶という視点で考えると鄧穎超に勝る女性はいなかった。

よく言われることだが、周恩来がとりわけ人気があるのは、終生ただ一人、鄧頴超と添い遂げたことがあげられる。毛沢東にとって江青は3度目の妻であり、毛沢東に目の敵にされ不遇の死を遂げた劉少奇は、何度も離婚と結婚を繰り返した。王光美は5人目の妻である。

封建制が続いた中国では、小さい時に両親が許婚者を決めてしまうという習慣があったため、愛情が伴わず、大きくなって新たな恋に目覚めて古女房と別れ、美しい娘と結婚するという例がままあったようだ。周恩来はその面で誠に評判がいいのは、けだし当然と言えるかもしれない。

二人の間には子どもはいない。周恩来は、お子さんがおられなくてお寂しいでしょうとしばしば聞かれたようだが、笑いながら、「子供がいない? 小超(鄧頴超のこと)と私にはたくさんの子どもがいます。国中の子供はみんな私たちの子供だからね」と言って本当に楽しそうに返答したようである。事実、革命途上で亡くなった革命烈士の子どもたちを何人も養子にして育てただけでなく、中国一の実務家とした采配を振るった周恩来にとって、中国の子どもたちはまさに周恩来夫妻のかわいい子どもたちであったともいえるだろう。

15) 西安事件で見せた卓越した交渉術

数々の闘いを切り抜けてきた周恩来だが、抗日戦争を経て新中国を建設する過程で、周恩来ならではの業績と評価され、内外共に「中国には周恩来がいる!」と評判がたったのが西安事件への対応だった。

軍閥だった張作霖の息子である張学良は、国民党東北軍の指導者として一時は「東北の プリンス」といわれたが、その後、阿片と女にうつつを抜かす腰抜け将軍と侮られていた。 しかし、父を殺害した日本への恨みまで無くしたわけではなかった。

1936年12月12日、張学良と西北軍の指導者楊虎城が、西安に滞在していた蒋介石を捉

まえ、内戦をやめて中国共産党を含め抗日統一戦線を共に闘うよう蒋介石に迫った。蒋介石は張学良と楊虎城の言うことを素直に聞く耳を持たず、事態を解決するために、張学良は延安にいる周恩来に西安に来てくれるよう打電した。

中国共産党は緊急会議を開き、周恩来は葉剣英らを伴い西安に飛んだ。事態を収拾する 力がない張学良は周恩来の到着を喜び、周恩来の「抗日統一戦線の指導には蒋介石が必要 である」との進言に同意した。

かつて、懸賞金付きで周恩来を逮捕しようとした蒋介石だったが、今は逆転した立場になった。周恩来は蒋介石の前に出ると、「蒋校長、お久しぶりでした」と黄埔軍官学校式の敬礼をして、かつて校長として上司の地位にいた蒋介石に呼びかけた。

周恩来は、「どれだけ大勢の者が蒋介石に殺されたか忘れたのか」と怒りの声を挙げた楊 虎城を説得し、また蒋介石をも説得して内戦を停止し、抗日戦線に立つことを合意させた。 蒋介石を殺すことなく抗日に立ち上がらせた周恩来の存在は一躍世界に知れ渡った。西安 事件は第二次国共合作に向う契機になったのである。

西安事件が起こる前、中国共産党は1934年4月からの蒋介石軍らの攻勢から逃れるために、1年以上に亘って1万2千キロ以上におよぶ行軍を開始した。有名な長征である。その過程の35年1月、いわゆる遵義会議で周恩来は、過去の軍事上の指導の誤りを自己批判した。

周恩来は、「毛沢東同志は軍事面で我々を指導するのに最も適しているので、今後、その 任に当たるべきだ」と、天才的な戦略家、指導者として毛沢東を評価した。

長征に参加した解放軍副参謀長でロシア語も解する伍修権は、その時の周恩来の発言を1984年ハン・スーインに、「誰もが感動しました・・・みんなの心が大きな希望に燃えた――自分自身のためではなくて、党のために戦っている男を目の当たりにしたのだから」と語った。毛沢東の指導者としての地位が確立したのである。それ以降、紆余曲折を経ながらも、周恩来は終生、表向き毛沢東に逆らうことはなかった。

中国共産党の最も良き理解者だったエドガー・スノーは、「周恩来は、行動が知識や信念と完全に調和している純粋の知識人という、稀有の存在である」と語り、『偉大なる道―― 朱徳の生涯とその時代』を著したアグネス・スメドレーも、「最も現実的、有能、敏腕・・・ 幅広い知識と教養を身につけた人物・・・偏狭な党派心にとらわれない持ち主」と絶賛した。

周恩来の家には他にも欧米や中国の知識人たちが集まった。その中には「クリスチャン・サイエンス・モニター」や「ニューヨーク・タイムズ」の記者以外にも作家のジョン・ガンサーや $\mathbf{W}\cdot\mathbf{H}\cdot\mathbf{A}$ ーデンなどもいた。

周恩来は、外国の知識人だけではなく、国民党に近い良心的な知識人や作家など、いわゆる中間派的な人たちが共産党を理解しシンパサイザーになるよう常に努力し続けたのである。

国民党の腐敗と、国民党戦士たちが士気を喪失していくことにも助けられ、共産党は農民たちから徐々に支持を広げていき抗日戦争に勝利し、その後の激烈な国共内戦を勝ち抜いたのである。

赤旗 2015 年 8 月 28 日付





地平線まで広がり、この地 た。トウモロコシ畑などが 東にある方正県を訪ねまし 域の大地の豊かさを実感し ハルビンから2001ほど 8月中旬、中国黒竜江省 中

年)後、日本から多くの人

満州事変勃発(1931

が開拓団として中国東北部

ものです。

者だという精神から建てた

本の民衆も侵略戦争の被害

に移民しました。日本が敗

亡くなった日本人の公墓が

て、日本の開拓団は土地を

奪った侵略者でしたが、日

人公墓を建立。中国にとっ

63年、方正県政府は日本

に旧満州(中国東北部)で

あります。

ました。ここには、70年前

公墓を訪ねて 旧満州の日本人



り。病気や飢え、集団自決 のはわずか5000人余 などで5000人以上が命 を落としました。

中、方正県には1万500 桁。そのうち、帰国できた 戦し、 ソ連が侵攻してくる 人の開拓団の人たちが集 友好園林」として整備され 尽力した岩手県沢内村の農 や、方正県の農業の発展に ています。毎年、数百人の 民の記念碑、日中友好の記 てた中国人養父母の公墓 日本人が訪れるそうです。 念碑などが建てられ、「中日 周辺には、残留孤児を育

争を起こさず、日中友好を 推進する決意を新たにしま きながら、二度と悲惨な戦 (方正県 (中国黒竜江省) 木々が生い茂る園内を歩

||小林拓也)

東京新聞6月7日付朝刊 鈴木敏夫(東京葛飾区) さんは本会会員、2014 年2月本会主催の「満蒙開拓平和記念館を訪ね

て」の旅に参加。 軍『慰安婦』」について聞くと「聞い の授業は終戦ごろまでが精いっぱ 曲でも歌われていますが、日本史 と、現在の日韓関係について正し 半島にどのような悪影響を与えた ていても、植民地化が戦後の朝鮮 史教員を務め、退職後の現在は、 かは分からない。そこを学ばない 大学の非常勤講師をしている。 い。例えば戦前の韓国併合は知っ サザンオールスターズのヒット 東京都立高校で四十年以上日本 今は大学で教えているが「日本

若者は近現代史学んで



報があふれているが、若者は歴史

でいる。インターネット上には情 き込む狙いがあるのではと危ぶん

をしっかり学んだ上で、情報を取

野側ってる

安保法案審議

権を与える国民投票法改正も進め でいる。一方、十八歳以上に投票

ており、若い世代を憲法改正に巻

とんど。戦争体験を直接聞く機会 たことがない」と答える学生がほ が年々減っていることもあり、若

を無力化し、憲法改正ももくろん ていないと感じることが多いね。 者が近現代史について知識を持っ 安倍政権は安保法案で憲法九条

元都立高日本史教員 てもらいたいと思う。 なるのは若者。自ら主体的に考え 捨選択してほしい。戦争で犠牲に

鈴木 敏夫さん(66)

撫順収容日本兵に寛大処

るいい機会になる。「 みが広がってほしい の手から手へ、取り組 は「平和と友好を考え しているが、野崎さん などで日中関係は悪化 尖閣諸島 をめぐる対立

遇し、釈放時に看守が 朝顔を知っていますか 学校に配布。沖縄県・ 朝顔の種を渡したエピ る元日本兵を寛大に処 を説明した上で知人や 子さん(60)は現地で得 順戦犯管理所が収容す 州)遼寧省にあった撫 へ阪市福島区の野崎朋 しの花」と呼ばれる。 に種を増やし、 いわれ ノードから 「赦(ゆる) -。中国東北部(旧満 撫順 (ぶじゅん) の 大阪の女性 朝顔の 種配

放。死刑はゼロだった。 を免除し、再教育して釈 された。中国は旧ソ連と は撫順戦犯管理所に移送 留された旧日本兵約千 シベリアなどに数年間抑 は対照的に、報復的な扱 いはせず、大多数は起訴 帰国の際、看守の一人 1945年の敗戦後、 ーもう二度と武器を持 平和や日中友好を訴え の種を手渡した。元日本 築いてください」と朝顔 害行為を証言しつつ反戦 連絡会を設立、自らの加 を咲かせ、幸せな家庭を 本に帰ったらきれいな花 年に出版した絵本にこの 兵らは57年に中国帰還者 って大陸に来ないで。日 た。後継団体が2006

> もらった。自宅ベランダ で栽培し、毎年4千粒近

朝顔の種数十粒を分けて

るようになった。 じ赦しの花として知られ 話が紹介され、題名と同 日本の朝顔よりも葉は 多かった長野県。

開館した満蒙(まんも 県阿智村)は野崎さんの う)開拓平和記念館(同

13年に

訪れ、敷地内に自生する 月、管理所だった建物を 咲かせる。この話に感動 小ぶりでハート形が特 した野崎さんは07年9 徴。愛らしい青紫の花を てきた。 今春とカフェスペースに て、来館者に無料で配っ 思いに賛同し、昨年春、 小分けにした種袋を置い

もに「幼い時に親戚から は、花が咲いた喜びとと 女性(75)からのはがきに 思いをさせてはならな い」と記されていた。 満州の話は聞いていた。 二度と戦争はいけない 「日本軍に殺された多く 花を見つめていると 最近、記念館に届いた 子どもや孫に悲しい



種を増やし、学校 いる野崎朋子さん (22日、大阪市)

野崎さん。「特に若い人

ずにいられない」という の中国人の無念さを思わ

に手軽なインターネット

の情報だけに頼るのでな に接するなどして事実を 、元兵士の証言や手記

京都新聞 2015 年 8 月 21 日付

の記事にある新谷陽子さんは方正の会会員、母堂の井筒紀久枝さん 「京大俳句を読む会」 岩波現代文庫の著者) はこの記事掲載後、天寿を全うされた

5 完

新興俳句の金字塔」と呼ば

が1933年に創刊した「京大 刊に追い込まれた俳誌がある。 れながら、太平洋戦争直前に廃 挙され、発行できなくなった。 俳句」だ。社会や恋愛など、幅 旧京都帝大(現京都大)〇Bら が、治安維持法違反で15人が検 広いテーマの作品を発表した 411 Ļ

(渡辺白泉 戦争が廊下の奥に立つてゐた

40年2月に会員8人が、治安維 皮切りに、合計15人が検挙され 持法違反の容疑で捕まったのを 深めた頃だ。戦争は静かに、い 際連盟に脱退を通告し、孤立を は、日本が満州国を認めない国 つの間にか生活に入り込んだ。

京大俳句」が創刊されたの 句』を読み終える。さらに研究 まれた。代表で俳人の西田もと つぐ(80)は「戦争が俳句に与え を深めたい」と話す。 た。間もなくすべての『京大俳



1日、兵庫県芦屋市の満州に渡る前 て、資料を読みながら話し合った= ●「京大俳句を読む会」の参加者た キクヱさん = 新谷陽子さん提供 に開かれた壮行会。前列中央が井筒 平畑静塔や井上白文地につい

た影響が、少しずつ見えてき 思文閣美術館(左京区)で「京 をきっかけに、「読む会」が生 大俳句の光芒」展が開かれたの かった京大俳句。2000年に 廃刊後は、

あまり注目されな

た」とこたえた。

なかった。 いと望んだのだ。本当は寮母や もない身では、あきらめるしか 少年義勇軍の若者の妻になりた **看護師になりたかったが、技術** 先生に手紙を書き、満蒙開拓青 家が貧しかったキクヱは校長

敗戦で一変した。夫はシベリア 娘を栄養失調で失った。 ら日本に引き揚げて、2歳半の に抑留され、キクヱは命からが こき使う日本人の姿だ。それが 見たのは、中国人をさげすみ、 そんな体験を、キクヱは俳句 満州で生活を始めたキクヱが

ちによって、7年間続けられて

田村山

(井上白文地)

山陰線英霊

基づつの訣

特高のさりげなき目が書架に

た。関西の俳人や俳句愛好家た

と人が集まる。月に1度開かれ

会議室に、ひとり、またひとり の場所にある市民センターの

超快艇

JR芦屋駅から歩いて約10分

創刊から80年余たった現在。

ている「京大俳句を読む会」

引き揚げた母親の体験を聞いて 後、旧満州(中国東北部)から 育った人がいる。城陽市の主 新谷陽子(58)だ。 「読む会」の参加者には敗戦

出身地、福井県の国民学校で撮 写真だ。撮影は43年。キクヱの 親、井筒キクヱ(94)の壮行会の 嫁」として旧満州へ渡った母 ったという。 枚の写真を載せた。「大陸の花 今夏に出す会報の第3号に1

のか。陽子が聞くと「うれしく れている。どんな気持ちだった はかたく、右手には包帯が巻か も悲しくもなかった。つらい女 わしくないほど、キクヱの表情 工春らしから抜け出したかっ 「花嫁」という呼び方がふさ

づいた。 都大に1年間留学し、「読む 会」に参加した。次第に、その 「自由さ」が問題視されたと気 専門は日本学。一昨年から京

界のあちこちで争いは続いてい ドイツにも、ナチスによる芸術 ま表現した作品が多い。かつて んな願いをこめ、今月末、ミュ だことを平和に役立てたい。そ る。研究者として過去から学ん が許されない時代だったのだ せず、悲しみや悲惨さをそのま への弾圧があった。自由な表現 戦後70年といっても、今も世 「京大俳句には、戦争を美化

俳句について発表する。 ンヘン大学での会議で、戦争と 子のもとにある。 **書き続けた原稿の厚い束が、** W)

もある。 読み聞かせると、そっと手をに 倒れ、入院した。陽子が手記を ぎりかえす。 涙を浮かべること 今年7月、キクヱは脳梗塞で

り (キクヱ) 八月を書いて語りて老いにけ

の大学院生、マーティン・トー

「読む会」に参加したドイツ

マス(26)は最初、不思議に思っ

か に見えない。なぜ弾圧されたの も多く、それほど批判的な俳誌 「京大俳句は生活を詠んだ句

や手配に昇華させた。二十数年

方正日本人公墓が私たちに問いかけるもの

----「方正友好交流の会」へのお誘い----

1945年の夏、ソ連参戦と続く日本の敗戦は、旧満洲の開拓団の人々を奈落の底に突き落としました。人々は難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒にさらされ、飢えと疫病によって多くの人々が方正の地で息絶えました。それから数年後、累々たる白骨の山を見た残留婦人がなんとかして埋葬したいという思いは、県政府から省政府を経て中央へ、そして周恩来総理のもとまでいき、中国政府よって「方正地区日本人公墓」が建立されました。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない1963年、中国政府は、中国人民同様わが同胞の死も、日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれたのです。日本人開拓民たちのおよそ4500人が祀られているこの公墓は、中国広しといえどもこの方正にあるものだけです。(黒龍江省麻山地区でソ連軍の攻撃に遭い、400数十名が集団自決した麻山事件の被害者たちの公墓も1984年に建立され、この方正の地にあります)

この公墓の存在は、私たちの活動もあり徐々にではありますが、人々に知られるようになりました。民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって管理維持されている公墓の存在を、更に多くの人々に知ってもらおう。「愛国主義」ではなく、民衆レベルでの国際的な友愛精神を広めていこうと設立したのが「方正友好交流の会」です。当会の前身は1993年に設立され、2005年6月に再発足し、日中友好の原点の地ともいうべき「方正」に光を当てたいと活動しております。

個人会員 一口 1,000円 団体・法人会員 一口 10,000円 (口数は最低一口、上限はありません)

方正友好交流の会

101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6 (社) 日中科学技術文化センター内 電話 03-3295-0411 FAX 03-3295-0400 E-mail: ohrui@jcst.or.jp 郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会

HP アドレス: http://www.houmasa.com/

ありがとうございました

前号の会報 20 号入稿後、2015 年 5 月 7 日以降にカンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を以下に記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。(敬称略、受付けた順に記載しました。2015 年 12 月 9 日現在)

高木昴 坂田和子 塚原寿美子 渡辺一枝 木村美智子 石井敏夫 大西広 石田ヒサ子 石原健一 齋藤實 永宮弥生 小出公司 山田敬三 山川梅子 田村正篤 下山田誠子 宮本邦彦 篠原国雄 阿久津国秀 小玉正憲 遠藤勇 酒井武史 竹中一雄 佐藤喜作 矢吹晋 木戸冨美江 内山則男 金成弘美 杉田春恵 田澤仁 貞平浩 鈴木幸子 丹羽 宇一郎 中井詔太郎 吉安蓉子 大島満吉 白西紳一郎 小関光二 篠田欽次 仰木忠幹 手塚清美 小畑正子 鈴木敏夫(東京杉並区) 橋本聰 長塚淑江 篠原淳子 榎戸吉定 中村静枝 網代正孝 岩永法子 須貝佑一 百崎進 古賀勇一 小倉光雄 光川澄子 広 田彰夫 中澤道保 山吉昭三 岡百合子 竹井成範 高木凉子 芹沢昇雄 及川淳子 寒 川一郎 山下美子 斎藤剛 石田和久 山本義輝 中島紀子 吾郷一二実 滝口洋子 瀧 亀久男 寺本康俊 原田清冶 石橋実 野中酉夫 長谷部照夫 藤村光子 佐藤すみ江 矢野光雄 高橋健男 小柳公代 小林淨子 浮田治 平松正子 小堀雄三 黒岩満喜 南 雲英雄 神田さち子 加藤重幸 新谷陽子 鵜沢弘 小岩井弘 渡辺保雄 南村豊實 佐 藤貞雄 山内良子 山田弘子 秋葉二郎 木村護郎 高橋幸喜 内山則男 石田武夫 牧 野八郎 寺岡浩三 川村範行 守屋宏 柳瀬恒範 小松征夫 名取敬和 野津喜美子 番 場明子 園木宏志 小林さゆり 林郁 及川康年 加藤稔 吉岡孝行 北澤吉三 藤井洋 子 杜穎

<編集後記>

12 月は、毎年忙しい時期だが、今年はとりわけ忙しく、年内の発行を断念せざるを得ないかと、一瞬頭をかすめた。しかし、なんとか年内に発行できる運びとなった。原稿も当初の予想を超えて集まった。最近知り合ったご婦人は10歳のときに、フィリピンのミンダナオ、ダバオで日本の敗戦を迎え、ジャングルでの逃避行を余儀なくされた方だった。改めて、敗戦に伴う日本への引揚げ体験はさまざまで、本誌もできれば、旧満州以外での体験記事などを掲載し、戦争を知らない人たちに伝えていかなければいけないと思った。

<日本人孤児と中国養父母展>では思わぬ出会いがあり、寄稿してくれた村上三保子さんもその1人である。ほかにも時間が許せば、いろいろとお話しをしたかったのだが、今回は叶わず残念だった。

会員及び読者の皆さん、ぜひ本誌にさまざまな体験を綴って送ってほしい。原稿というと、なんだか気構えてしまいがちだが、知り合いの友人に手紙を書く、というような気持ちで編集部に送っていただければと思う。(大類)

≪表紙写真撮影:寺沢秀文≫

『星火方正〜燎原の火は方正から〜』(第 21 号) 2015 年 12 月 18 日発行: 方正友好交流の会 編集人: 大類善啓 Email: ohrui@jcst.or.jp 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-6 日本分譲住宅会館 4 F (社)日中科学技術文化センター内 電話: 03-3295-0411 FAX: 03-3295-0400 郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会 HP アドレス: http://www.houmasa.com/